番長戦争へようこそ

可雲太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
番長戦争へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ２３１２Ｘ

【作者名】
可雲太

【あらすじ】
少年は戦い続けるためと番長になるため転校生としてやってきた。それが『番長戦争』という戦いに巻き込まれる運命だったとも知らずに。
番長部のおかしな仲間達と一緒に『番長戦争』で巨大な敵に立ち向かう転校生は、必勝を目指し訓練とルールの穴を突くのに邁進する。
「正義は必ず勝つんだ」とつぶやくと「お前が言うな」と返される転校生に明るい未来はあるのか？

プロローグ

「貴様、俺達に喧嘩を売ってただですむと思ってんのか……」

アスファルトに這いつくばった金髪の男が鼻血を流しながらも、ぎらついた目で見上げ出血でピンクに染まった唾を吐いた。その唾の標的になったのは、ついさっき彼を殴り倒した相手だった。

一撃で彼を沈めるだけのパワーを秘めた巨体に大きく突き出したリーゼントとサングラスをかけた少年にまで、おしくも唾は届かなかったのだが、その少年は唾の飛距離を見切っていたかのように微動だにしなかった。

倒れている男が無理矢理ナンパしようと絡んでいた少女は勿論、周りのつるんでいた男達もすでに逃げ去っている。だが、この倒れた男は飛び抜けて執念深いタチらしい。尻尾を巻いて退散もせず、ぶつぶつと恨み言を止めようとしなかった。

「俺達のチーム全員で追い込んでやるからなぁ。その時を楽しみにしてやがれ」

と耳障りな笑い声を上げる。リーゼントの少年は相手の脅迫を無表情に見下ろしていたが、やがて退屈したように背を向けた。傍目にはいかにもクールそのものであり、久しぶりの実戦にサングラスの下の右目は涙に潤み「予想以上に痛かったぞ、もうお家に帰りたい」と彼が内心で思っているのは表には出ない。

「俺達が何十人いるか知ってるのか？　貴様一人でどこまでがんばれるか試してやるぜ」

「俺の好きな言葉を教えてやろう」

月並みな脅し文句にも振り向くことなくリーゼントの少年は言葉を返した。本当は動かそうとすると痛くて首が回らなかっただけなのだが、傍らからはまるで顔を向けるまでも無いという意思表示としか見えない。

少年は深く息を吸い込むと唇をなめて湿らせる。よし、実戦習熟も兼ねていたがここで格好をつけるために、痛い目にあってまで人助けをしたんだ。決め台詞くらいは、鏡の前で練習したようにビシッとしないと割りに合わない。そう考え、声がかすれないようにカラオケの歌い出し同様に注意して声を張る。

「正義は必ず勝つ、だ。それと、逃げるつもりはないが、俺は来週転校するから、お礼参りならそれまでにしてくれ」

言い捨てるとそのまま去って行く少年に男が罵声を浴びせる。だが気にするな、あくまでも余裕を持ったようにゆっくりゆっくりと歩くんだ。決して痛む足を引きずって、そそくさと退場するようなみっともない姿は見せられない。そんな少年の内心に従うように、鈍い痛みの為にてきぱきと動けないのがかえって悠然とした雰囲気をかもし出していた。

「おい、待てよ勝ち逃げするつもりなのか！　大体てめぇが正義だと誰が決めたんだよ！　おい……」

その罵声に答えるべきリーゼントの少年は、すでに路地から姿を消していた。

◇　◇　◇

彼は教室内のざわめきから隔離された廊下で、ただ一人深呼吸を繰り返していた。塵一つない清潔な廊下の無機質な眺めが緊張感と寒々しさをいや増している。深く吸い込んだ空気にさえ生活臭が薄く、疎外感をいや増させる。

今日から通うことになった校舎は、まだ己を部外者だと拒絶しているようだった。

大丈夫、ちょっと自己紹介するだけじゃないか。俺は強い。俺はグレート。俺ってブラボー。そう自己暗示のように言い聞かせて、窓ガラスに反射する自分の姿にチェックを入れる。転入生は第一印象が大事なのだ、みっともない格好は見せられないと拳を握り締める。

うん髪型もきっちりしているし、特注した制服にも隙がない。どの角度から見ても文句のつけようがない見本のような学生姿だと確信した。

これならばレベルが高いと評判の野際学園（やさいがくえん）でも問題ないはずだ。いかにも肉食系しかいないような学校名だ。注意を怠るなんてことはできない。

そう孤独に頷いていると、教室の扉越しに今度担任となった男性教師の声が届いた。

「それじゃ、転校生は入ってくれ」

「押忍！」

さっきまでの動揺した様子の片鱗もない気合の入った返事と共に扉を全力で開く。扉の開閉する音というよりも破壊音が響く中、彼はわき目も振らず大股で黒板に向かうと大きく自分の氏名を板書した。『折葉（おれは）　正義（せいぎ）』ちなみに読みやすくするためか横に振り仮名ま

できちんと自分で書いている。しかも彼のその厳つい風貌に似合わずチョークであるのに筆でかかれたような錯覚さえおこさせるほど達筆であった。

――あんたの名前って姓名判断によると性格は絶対に自己中心的って判定されるよね。堂々と教壇に立つ正義に対してこの教室内の生徒は皆が突っ込みたそうだった。彼の自己紹介後によく有る、ちょっと居心地の悪いクラスメートがお互いの顔を窺っているような雰囲気が教室を覆った。

だが誰も口にできなかったのは、彼が名前に続けてこう大書した為だ『今月の俺の目標――番長就任』『好きな言葉――正義は必ず勝つ』。

「「え？　その好きな言葉って、自分が勝つことを無理矢理に正当化しようとしてるだけじゃ？」」

教室中に満ちた実にもっともな戸惑いの声に逆切れしたのか、正義は平手で黒板を叩き宣言する。

「俺の名は折葉　正義だ。転校早々だが番長としてこの学校をシメさせてもらう。文句のある奴、今この学校をシメてる奴、いつでも校舎裏への招待状を持って来い。俺は誰の挑戦でも受けるぞ」

不敵にも堂々と言い切るその姿は、百八十センチを超える長身に分厚い体躯に見合った迫力満点なものだった。

余りに図太い態度――さらにきっちりとリーゼントに整えられた前方に飛び出した髪に、漫画でしかお目にかかれないような布地を一般の三倍は無駄に使った長ラン・ボンタンといった不良生徒御用達の改造制服。おまけに仕上げとばかりにサングラスをかけて傲然と胸を張っている。

まさに絵に描いた不良を体現するインパクトの強すぎる登場に圧倒されたのか、教室は静まり返った。その中で一人の真面目そうな眼鏡の男子生徒が恐る恐るといった様子で手を上げる。

「あの、それって正義君は番長になってもいいってことだよね？」

「ん？　そう言ったつもりだが？」

正義がそう答えると「おおおー！」と地鳴りめいた歓声と爆音じみた拍手が轟いた。新たにクラスメートになった全員が「万歳！」「ハラショー！」「ブラボー！」と知っている限りの言語で喜びを爆発させている。

怖がられるか反発されるだろうという自分の予想から大きくずれた周囲の反応に、どうしていいかわからず身構えている正義へ一人の女生徒がつかつかと歩み寄ってきた。

近づく少女は正義と遜色ないほど長身の上、濡れたように漆黒の髪をポニーテールで高く結っている為にさらに背が高い印象を与えている。無駄な贅肉は認められないとばかりに鍛えられたスレンダーな肢体からは、凛とした清潔な雰囲気が漂っていた。

ドラマに出演していても不思議ではないほど整った美貌だが、出演するのが時代劇なら役柄はお姫様よりはくの一や女剣士がキャスティングされるだろうと正義は妄想した。なぜならば、彼女の一番目立つ特徴はその細い腰に朱塗りの鞘に収まった日本刀がある点だからだ。

その大柄な美少女はつり目気味な瞳を僅かにほころばせると、正義にとっては意味不明な歓迎の台詞を固い口調で吐き出した。

「ふふ、部員不足から今年の番長戦争はあきらめねばならないと落胆していたが……、開幕まで一月の時期にお前のような番長を目指す転校生が現れるとは、神様も粋な計らいをしてくれる。我が番長

部はお前――折葉　正義を歓迎するぞ！」
「お、おお」

思わず差し出された手を取ってしまう。その手はほっそりとしているけれど握り返す力は強い上、指の付け根には目立たないがうっすらとタコがある。腰の物からして剣術でもやってるのかな……とまで進みかけた思考に正義はストップをかけた。

「いや、ちょっと待て！　なんだか番長部だの番長戦争だの知らん単語が出てきたぞ！　というかお前は誰だよ！」

動揺もあらわにずれたサングラスを押し上げる正義に対し、少女は返って戸惑ったように細い眉根を寄せる。

「もしや、正義は知らないでうちの学校に転校してきたのか？　その上でさっきのような宣言をするとは……なんというか物知らずにもほどがあるな」

ちらりと周りに視線を飛ばし近づきかけたクラスメートを牽制すると、握手した手を放して額に当てる。やれやれと言わんばかりに吐息をつくと、改めて正義の目を正面から見つめ返す。

「最初から説明するのも面倒だから、省略して話すが……。ああ、その前に自己紹介をしておくぞ。私の名は綿式（わたしき）　怜（れい）だ。決してフルネームでは呼ばずに、怜と呼ぶこと。
万が一フルネームで呼んだ者は、なぜか皆が都市伝説で私の名前が口癖の女に会うより酷い目にあっている。正義も気をつけてくれ」

と怜はレーザーのような眼光で念をおしてきた。確かにこの迫力は噂になった口裂け女以上だろう。まあ、俺も自己紹介の度に辟易

している事を思えば、名前でさんざんからかわれたトラウマを持つ同類だと納得できる。

「話を戻すが、私は我が校の番長部の副部長を拝命している。
そして私の所属する番長部というのは、簡単に言うと番長戦争で他校の番長部に勝利することを目的とした部活動のことだ。この部活動もせずに校区内で番長を名乗ろうなどへそで茶を沸かしてしまうぞ」
「そ、そうなのか？　リサーチ不足ですまんな。
……いや、だからちょっと待てって番長戦争ってのはなんなんだよ！」

一瞬納得しかけ、慌てて抗議し始める正義を怜はきつい眼力で黙らせた。彼女の立ち居振る舞いは、この学校の女子制服のセーラー服が元々は水軍の軍服であったことを思い起こさせるほどの威圧感だ。今まで正義が出会ったどのヤンキーよりも迫力のあるガンつけに、無意識に一歩後ずさり背中を黒板にぶつけてしまう。
背筋に水滴を落とされたように反射的に黒板から身を離し、サングラス超しでも判るほど情けない表情をしておニューの制服からチョークの粉を払う正義の姿に怜は再びため息を吐いた。

「ま、細かい事は放課後に番長部に来てくれれば説明する。入部手続きもしなくてはいけないしな」
「いや、だから俺は説明してほしいだけだ。別にそんな怪しげな部活に入部なんてするつもりはねーぞ」

と背中の汚れを振り払っていた正義は、入部を既定事項のように話す怜に不快感を覚える。俺を勝手な都合でどうこうできる飼い犬かなんかと思ってるんじゃないか？　このお嬢さんは。
反発心を瞳に託し、堂々と怜の魔眼じみた睨みのメンチ切りを受

けて立つ。顔をつき合わせること数秒、怜は口の中だけで舌打ちするとそっぽを向いた。

「……入部うんぬんはその時話し合おう。とにかくお前に番長部と関わらないという選択肢は無いはずだからな」

「は？　だからどういう意味」

なんだよと正義が続けるより早く、教室内のスピーカーから大音量の放送が流れた。

『放送部より緊急のお知らせです！　ただ今入手した情報によりますと、今日二年A組に転入した折葉　正義君が番長に名乗りを上げたそうです！　彼の参加により今年は絶望視されていた番長戦争も期待できるかもしれません！　皆さんこの勇気あるルーキーに暖かいご支援と生温かいご視線を！』

とのハイテンションかつ微妙に韻を踏んだ放送に、正義が反応する間もなく校舎が揺れるほどの大歓声と拍手が轟いた。騒音公害並みの騒ぎ中からは「マジかよ、どこの命知らずだ」「転校してくる奴は、過去に傷を持った全国レベルの天才ってのがテンプレだ」「全国レベルの番長の才能って何だよ？」だの興奮した話しが明らかにこの教室外からも届いている。

怜を除くクラスメートは勿論、担任までもが彼に向かって拍手を始めた。どこに準備されていたのかクラッカーまで鳴らされているのに唖然としている正義へ怜が眉をひそめたままでぼやいた。

「今更番長部について何も知りませんでしたって、言える雰囲気でもないだろう」

「まあ、確かに」

誕生会の主役のように皆に囲まれて祝福されている状態で「すまん。全部誤解だ」と空気の読めない発言は正義にはできなかった。
くそ、度胸試しのつもりで不良や番長達の激戦区と言われるこの学区を選んだのだが間違いだったのか？　サングラスに隠されているが正義はすでに涙目になりかけていた。滲む視界に、ああこれだけでもサングラスかけてきた甲斐があったなぁと軽く現実逃避する。
それを察知したのか怜は正義の顔を一瞥し、上品さを保ったまま鼻で笑うという高等技術を使う。

「それにしても、サングラスにリーゼント。おまけに改造制服……よく校則違反で注意されなかったな」

とがめるような口調に、担任教師が慌てて「それは……」と言い掛けるのより早く正義が口を挟む。

「サングラスは『これを外すと俺の左目がうずく……』でＯＫ、リーゼントは『おいどんは極端なクセ毛なんでごわす』で許可されて、長ランは『僕、冷え性なんです』でお目こぼししてもらえたぞ」

担任教師が何か可哀想な子供を見る目をしているが、正義としては何も嘘をついてはいない。
怜は「先生方も寛容すぎるが、お前もキャラをつくりすぎだ。というか一人称は統一せねば、キャラがぶれるだろうに……」と嘆息した。

「そっちこそ、日本刀を差した女子高生なんてリアルでは初めて見たぞ。あきらかに怜のほうが危険人物だろ」
「私の方は校則違反でもなんでもない。携帯許可を所持してるぞ、なにしろ番長部だからな」
「え？」

さりげない怜の一言に背筋に冷や汗が流れる。そんなに危険な部活なのか『番長部』って。人知れず戦慄している正義に対し、軽く怜が声をかけた。

「大丈夫、大丈夫だ。何か動揺してる気配がするが、番長戦争ではこんな日本刀なんか可愛い物だからな」

「そうなのか？　だったら安心……」

怜の言葉に胸を撫で下ろしかけてはっとする。日本刀が可愛い物程度の扱いってちっとも安心材料にならない事に気がついたのだ。

いや、むしろ不安の原因になりそうだ。番長戦争ってのはもっと洒落にならない武器で戦うってことなのか？　正義の背筋を伝う汗の量が増加していく。

では、放課後部室にて待つと踵を返す怜の隙のない後ろ姿と、その腰に下がる日本刀に正義はとんでもない所に来てしまったのではないかと足が小刻みに震えるのを止められなかった。

第一話　番長部へようこそ

正義は授業中や休み時間での自分への注目度のあまりの高さに辟易していた。

確かに転校生や番長になると宣言した事で、畏怖の視線に晒されるのは覚悟していた。だが、遠巻きにされひそひそ声で「今度の番長戦争の生贄がはあいつか」とか「可哀想にまだ若いのに……」「いやあたしらと同い年でしょ」と気の毒そうに噂されるのは想定していなかったのだ。

ほとんど珍獣、それも絶滅危惧種の最後の姿を一目見ておこうというノリだ。

何しろ学科ごとの教師までもが、

「命短し　恋せよ乙女と言うが、これは男にもあてはまる。悔いの残らんようにな。

あ、正義の宿題は免除してやるから、精一杯学園生活を楽しめ」

と余命一ヶ月を宣告された癌の末期患者の如く扱ってくるのだ。

クラスメートの対応もある女生徒など「ぐす、実は私、正義君のことがずっと前から……。いいえ忘れて」と思わせぶりに走り去るのだ。思わず「初対面だろ！　今日会ったばかりだろ！」と突っ込んでしまった正義は悪くないはずだ。かまわれるこっちが鬱陶しくなるほどに、周囲の皆が強制的にイベントと思い出を作り上げようとしてくる。

勿論転校する前の学校でも、こんな時代遅れの不良のファッションをしていれば悪目立ちをするのも避けられなかった。だが、怖がられるでもなく手を合わせられて「南無阿弥陀仏」と迷わず極楽へ

行けるようにと唱えられる経験などあるはずもない。
そんな戸惑いが大きかっただけに放課後のベルの音は正義にとって救いの鐘に聞こえた。

今だ遠巻きになり携帯で「生前の思い出に」と写しているクラスメートから怜の姿を探すが、待つほどもなく彼女の方から正義の席へと歩いてくる。怜の歩行は滑らかで重心にぶれがない為に、ゆるやかに感じるが実際にはかなり速い。気がつけばすぐ側まで接近されていた。
この足捌きは要注意だな、と正義は頭の中の『対学園内仮想敵ノート』に書き込みながら「部室へいくぞ」とだけ告げる怜の後を追った。

しばらくは無言のまま二人で連れ立って歩く。正義も何度か怜に話しかけようとはしたのだが、口を開こうとする度に送られる絶対零度の視線に屈していたのだ。
だが、先導する怜が制服のスカートから鍵を取り出して、一階の廊下の奥にある鉄製の大きな扉に差し込もうとするのに我慢ができなくなった。

「おい、あんた一体どこに行くつもりなんだ？」
「番長部の部室に決まっているだろう。先刻そう伝えたはずだ、正義の耳が飾り物でなければ聞こえただろう」

いかにもうっとうしいと態度で示しながら、怜は正義に向き直ることもなく鍵を回す。
シェルター並みの厚さを誇っている扉が錆付いた甲高い軋みを上げて開くと、そこには地下へと続く階段が姿を現した。
なぜか照明もなく薄暗い階段などはコンクリートの打ちっぱなしだ。「さ、行くぞ」としっかり鍵をかけなおし怜が先に進んでいく。

鈍い音と共に閉ざされた扉により校内のざわついた気配が遮断され、空気が湿っぽくかび臭くなり足音はやけに反響する。ほとんど気分は洞窟探検隊だ。

「あの、怜さん。ここ本当に部室に向かってるんですか？　さっきの扉も錆付いた音がしてたし、こんな人気のない地下に部室があるって変じゃないですか」

無意識の内に敬語になった正義に怜は肩をすくめた。

「別に地下に部屋があるのはおかしくないだろう。それに、扉を開閉するたびに音が鳴るのは簡易防犯システムだそうだ。他のこの廃墟っぽい雰囲気は……まあ部長の趣味らしい」

「部長の趣味って……。番長部の部長なんだからとうぜん番長なんだろう？　どんな趣味してる番長なんだよ」

心なしか赤くなった顔をそむけた怜に正義は『ああ、こんな事やらかす部長の説明は身内の恥を晒すみたいで照れてるのかなぁ』と好意的に解釈した。おかげでプレッシャーが薄れ、敬語仕様だった言葉も即座に普通モードへ回復する。

頬をかすかに染めたまま怜は律儀に正義に警告した。

「ああ、変わった趣味をしているからとか見た目とかで部長をなめるなよ。番長部には私以外に二人しかいないがどちらも一筋縄ではいかない曲者達だ」

正義は音を立てずに口笛を吹く。この一角の武道家である怜の折り紙つきとは、一体どんな奴らが番長部にいるんだろうか。喧嘩上等のヤンキーみたいな奴だろうか、いや見た目で判断するなと言うからには細身のわりに技が切れる格闘家タイプかもしれない。

いづれにせよ正義が番長を目指すためにはいつか戦うことになるだろう人物達だ、じっくりと見定めさせてもらうべきだな。

胸中に湧き上がる興奮と不安を押し殺し、ひたすら下へ階段を降りる事数分ようやく目的地へたどり着いた。なぜ正義にも目的地が判ったかというと『ようこそ番長部へ』と看板がＬＥＤライトでデコレーションされていたからだ。

なんだこれはと怜を窺うがこちらの気配に気がついているはずなのに絶対に目を合わせようとしない。

「さ、さあ着いたぞ。ここが我が『番長部』の部室だ。この時間なら、もう皆が正義を待っているはずだ」

派手な看板などスルーして何か誤魔化すような態度で部室の扉を開けた。

正義の喉が鳴る。さて、鬼が出てくるか蛇が出てくるか……。

扉を開けると、そこにはウサギの縫いぐるみを抱きしめているぶかぶかな白衣を着た幼女と、短パン一枚で鏡に向かい大胸筋を誇示するポージングを決めている少年がいた。

バタン。

「今のは？」

「……私は何も見ていない」

電光のスピードで扉を閉ざした怜はノブから日本刀の柄へと手を滑らせた。「お前は？」「何も見てないっす！」敬礼する正義にほっとしたように居合いの体勢を崩す。またこの刀を研ぎに出すのを覚悟したぞ……と怜の口から洩れる言葉に正義は寒気がした。また

という事は彼女は何回か日本刀を研ぎに出したのだろう、その理由は知る由もないが。

咳払いでこちらの気配を示した後ゆっくりと怜がノックをするが、しばらく中からは騒々しい気配が消えなかった。ややあって「入ってもいいぞ！」と澄んだ幼いソプラノボイスで許可が出る。

おそるおそるドアを開けて部屋に入ると、そこは部室というよりも広すぎる応接室のような内装だった。さっきちらりと眺めた限りでは二人の子供に気をとられたが、ソファセットなどが完備してあるこの重厚なインテリアも、部室としてはいろいろ不自然に豪華だと正義には感じられた。

そのソファに座して待つことなく、少年と少女が立ち上がって迎え入れてくれた。さっき居たのは幼女のはずだったが……と正義がサングラス越しに注意すると、すぐにその種は割れた。

少女の履いている学校指定の革靴は異常なまでに底が分厚くなっていたのだ。厚底ブーツとかシークレットシューズとかいったちゃちな物ではなく、三十センチほどの高度を稼いでいる。それを履いた為に幼女から少女へと見た目がレベルアップしたのだ。そのあまりの厚底ぶりに、不安定に揺れる体を左手のステッキで床を突く事で支えている。

もう一人の少年は小柄ながらがっしりした体格に似つかわしくない気弱げな顔付きをしていた。今はきちんと制服を着用しているが一度目の遭遇時の裸の上半身は、身長を除けばプロレスラーやボディビルダーにも引けをとらない頑丈そうな肉体だった。

並んだ二人の内で特に少女に向かって怜は丁重に頭を下げる。

「転入生の折葉　正義をお連れしました」

「うむ、ご苦労だったな怜！　それで貴様が番長部に入りたいと言

う変わり者か！　歓迎するぞ！」

と歯切れ良く歓迎した少女は胸を張ると「僕が部長の矢張（やはり）　千美（せんみ）でこっちにいるのが板井戸（いたいと）　悟（さとる）だ！　よろしくな！」と自己紹介をした。正義は思わず「部長？」と疑問符を浮かべながら怜を窺うが彼女も沈痛な面持ちで頷く。

「信じ難いのは理解できるが、千美が部長であることは確かだ。それに彼女は外見にそぐわない能力の持ち主だ。弱冠十歳にして飛び級によってすでに最上級生なのは伊達ではない。それにもう一人の悟の方も、そのまあ、なんだ只者ではない」

と奥歯に物が挟まったような紹介をしてくれた。

千美は頬を膨らませると、その可愛らしい顔にできる限り険悪な表情で「怜！　外見にそぐわないとは何だ！」とふらつきながら怜の胸ぐらに掴みかかろうとする。非常に危険だと正義には感じられる光景だった。怜がではない千美の挙動がだ。

別段怜が怪我させるほどの反撃をするとは思えないが、千美が歩を進める度に生まれたての小鹿のようによろめくのが気になって仕方がないのだ。

しばらく、じたばたともがいていたが怜が無理矢理ソファに座らせるとようやく千美はふてくされたように動きを止めた。

「その千美部長だったよな？　背格好を言われて気に触るのは判るが、あんまり高すぎる厚底ブーツを履いていると危ないぞ」

と忠告した正義に彼女は凄い勢いで振り向いた。

「な、なんで僕がシークレットブーツを履いているってわかったん

だ！？　あ、もしかして僕の名前をおかしな読み方にして気づいたのか？」

と驚愕の面持ちで「まずいぞ、ちびっ子なのがばれるとは……」とか「今すぐにでも洗脳は可能か？」とか呟きを洩らしている。何だよ、部長の名前のおかしな読み方って。ああ、なるほど『やはりちび』とも読めるか。だがそれ以前の問題だぞ。

「いや、なんでって言われても千美部長の靴を見れば一発で判るでしょうが」

とつっこむ正義に怜と悟は慌てたように顔の前で手を左右に振った。やべ、もしかして喋っちゃいけない秘密だったの？　と動揺してずれてもいないサングラスを押さえる正義の態度に、不穏な空気を感じ取ったのか千美は番長部の部員を睨みつけた。

「もしかして怜も悟もこのシークレットブーツの事を知ってたの！？　それで影で僕の事を笑ってたんだね！　絶対誰にもばれてないと確信してたのに……、こうなったら部員全員の洗脳を義務付けなくちゃ！」

と千美は身長を詐称するのに超法規的な解決法を口走りだした。前にモルモットで実験した薬がどこかに……と空回りで湯気を出している部長の頭に手をポンと置いた怜は「部長の本当の身長は全校生徒がご存知だから、今更何をしても無駄だろう」と追い討ちをかけた。

「そ、そんな！」

ぐらりと揺れて崩れ落ちかかる千美の肩を正義は慌てて支えた。

こんなにショックを受けるなんてこの子は本当にばれていないと思っていたらしい。番長戦争とやらがどんな物か知らないがいくらＩＱが高くとも、仮にも部長がこんなちびっ子の楽観主義者ではどうしようもないのではないか。

悲観する正義はその悲嘆にくれるちびっ子に向かい「部長がこんなに小さかったなんて、僕だけは全然気がつきませんでしたよ」と励ましにならない言葉をかけている少年を観察した。

こいつは板井戸　悟といったな。怜の紹介ではこいつも一筋縄ではいかないそうだが……。あからさまな正義の値踏みする視線にも全く動じる気配はなく、てきぱきと千美の介抱をしている。

「ふむ、ちょうどいい機会だな。互いの力量を見るためにも、悟と正義はここでスパーリングしてみたらどうだ？」

千美の愁嘆場にあきたのか、二人が探り合う雰囲気を察して怜が提案してきた。

勿論正義は快諾したが、意外にも悟も躊躇なく受けた。ベビーフェイスに似合わず硬派なのかもしれんなと、仲間になる予定の少年へ微かに評価を上げておいた。

この地下部室には不必要なまでに十分な広さがある為、ソファなどの応接セット以外にも部屋の一方ではサンドバッグやトレーニング器具が散乱している。これだけのスペースがあれば軽いスパーリング程度はできそうだった。

正義は向かい合う悟の体つきを観察した。これはさっきまでのちらっと見ただけとは違い、対戦相手としてどれほどの技量の持ち主かを品定めするものだ。幸い悟は上半身裸に短パンという軽装になったので戦力分析はしやすい。

頭一つ半も見下ろすほど正義とは身長差があるのだが、体格の差はそれほど感じられない。それほど悟の肉体は格闘家というよりボディビルダーとして出来上がっていた。

――こいつは気を引き締めてかからねえと、俺でも食われかねんな。

悟は重心を低く落としたクラウチングタイルに構えている。筋肉の付き方といいこいつはアマチュアレスリングの格闘スタイルのようだ。べた足でどっしりとした姿は小さな岩を思わせる。

対する正義はサウスポースタイルの打撃の構えをとった。彼がかじったのはボクシングと空手だが、顔を打たれるのを想定してガードが高い。K－1などでよく見受けられるキックボクシングに近かった。

正義は右利きだがサウスポーの構えにしていた、彼にはこの方が相手が良く見えるのだ。そして利き手の右が前になっているのが変則なのか、構えを変えてからの喧嘩での戦績はむしろKO率が上がっていった。

さて、どうするか？　正義は油断なく間合いを測りながら軽くステップを踏む。悟が組み技系なのは間違いないだろう、ならば不用意な打撃はタックルされる隙になりかねない。

試しとばかりに軽いローキックを放つ。ほとんど体重を乗せない足先を走らせるだけの蹴りだ。勿論威力もさほどないが、隙もつくらずにすむため牽制にはぴったりの技だ。

そのローキックを悟はきっちりと受け止めた。狙われた左足を浮かせてヒットポイントをずらし、筋肉の分厚い部分で受け止めほぼノーダメージに抑えたのだ。

正義は悟の打撃対策がしっかりしていた事よりも、自分より軽量の相手がびくともしない――それどころか蹴った足が強烈に弾かれ

た感触に驚いていた。
まるで人間の体を蹴った感触がしない。以前スパーリングしたことのあるムエタイ選手の肉体の方がまだ柔らかさがあった。
こいつは相当できるな、正義の頭が緊張感で冷たく澄んでいく。

対照的に悟の顔は上気していた。今の攻防で正義の技量を察したのか、薄い笑みが浮かぶ唇を舌を覗かせて湿らせる。だが、彼の構えは微動だにしなかった、あくまで『待ち』を崩さないようだ。
打撃屋に対して自分はガードを固めて、相手のミスを逃さずタックルから寝技に入る。まあ、手堅い作戦ではある。俺は嫌いだけどな。正義の冷えた頭に熱が入った。
自分から前へ出ろや！　そんな気持ちを込めてセオリーを無視していきなり深く踏み込むと右のボディブローを撃つ。

驚いた事に悟はその攻撃もまた身じろぎ一つせずに腹筋で受け止めた。対戦相手の肋骨を折った事もある正義自慢のパンチだったが、別にダメージ無しで受け止められるのはまだ納得できる。だが、このパンチに合わせてタックルにくるかと想定していた正義には相手のノーリアクションは意外だった。

こいつ俺の事を見下して遊んでやがるのか？　正義の脳の中心部が熱くなっていく。舐めたまねしやがって、思い知らせてやる……。
視線を強くして悟の様子を窺うと、なぜかまるでダメージを受けていないはずなのに息を荒げて頬の上気も増している。こんな短時間でスタミナが切れるはずもないのだが、今のパンチでトラブルでもあったのだろうか？

怪訝に思い、軽くバックステップを踏むが相手も遅滞なく等距離だけ間合いを詰めてくる。しかしながらそこから一向に攻撃に転じようとはしない。

防御は鉄壁だが全く攻めようとはしない。それどころか間合いを外そうともせず、ずっと正義の打撃が有利なポジションに突っ立っている。
この少年は何がしたいのか？　戦闘中にあってはならない困惑が、正義の脳裏に浮かんだのを見透かしたように悟が息を荒げて喋りかける。

「どうしました？　まさかこれで終わりって訳でもないでしょう。さあ、もっとどんどん打ってきてくださいよ！」

こいつの妙な態度はなんだろう、挑発してカウンターを狙ってるのだろうか？　反撃の素振りさえ見せず、ばっちこーい！　と攻撃を要求する悟の行動は理解に苦しむ。
そんな正義を見かねたのか、怜から疲労のにじむ声が届いた。

「もうそのぐらいでいいだろう。正義も悟も大体戦闘スタイルが判ったようだし」
「え？」
「いいえ、まだ全然足りませんよ！　さあ、カモンカモン。なんなら反撃なしってルールで、僕がサンドバック役でもいいですよ！」

とまどう正義に悟は元気良く打って来いと挑発する。なんだこいつと、じりじりと後退しつつ怜を横目で窺うと彼女も千美も頭を押さえていた。

「正義はまだ判ってないのか……その悟は真性のマゾで打たれたりすることに興奮する奴なんだ」
「そうなんだ！　何べん注意してもどうしようもなかったんだね！」
「はあはあ、みんな酷いですねぇ」

強烈な悪寒に正義はその場から飛び退いた。顔を引きつらせて悟を見るが、相手の先刻同様に上気した頬も荒い呼吸も今は怪しげな雰囲気しか感じ取れない。

はあはあとノーガードになり間合いを詰めてくる少年と「僕の身長の秘密を知られたからには抹殺だ！」と気炎を上げる幼女。その傍らにはこっちから全力で目を逸らしているサムライガール。

正義はこれから何度も繰り返すフレーズをこの時初めてつぶやいた。

この番長部は間違いなくおかしい。

第二話　番長戦争とはなんぞや？

スパーリングを終え、運動で出たのとは違う冷や汗を拭く。本来の正義ならば、たかだがこの短時間程度で汗が噴出すほどスタミナを消耗するはずもない。

正義にとっては肉体以上に精神的疲労の方が大きかったのだ。

悟はそんな試合後の疲れなどまったく表さずに、まだ頬を赤く染めにこにこしている。……できるだけこいつには近づかないでおこう。正義は決心して拳を握り締めた。

「ひどいなぁ。そんなに警戒心バリバリな態度をとる事もないでしょう」

「……俺は個人的には偏見が少ない方だと思っているが、殴られるのを喜ぶ奴とは分かり合えないぜ」

正義にばっさり切り落とされた悟は童顔を俯かせた。

「僕だって昔からこんな性格じゃなかったんですよ」

「へー」

「まだ小学生のころでしたが、その時から背の低い僕はいじめの標的でした」

「へー」

「毎日目立たない所に青あざを作っていた当時は、自殺さえ考えていましたよ」

「ほー」

「そんな時に思ったんです。どうせ死ぬような思いをするなら、格闘技でも習って厳しい修行で苦しんだ方がましだと」

「へーへーほー」

「与作は木を……、真面目に聞いてくれませんかね」

さすがに不快気味に眉根を寄せる悟に、正義はいくらなんでも冷たすぎたかと反省した。これから同じ部活動をするのにあまりに息が合わないのもまずいだろう。

軽く頭を振ってクールダウンさせると、悟に向かって僅かに頭を下げる。

「悪かった。他人の苦労話を聞くのは苦手なタチなんで聞き流していたが、これから仲間になる相手に対しては失礼だったな。

真面目に拝聴するから続けてくれ」

「ええ、判ってくれればいいんです。

――それで近くにあった中国拳法に入門したところ、僕には才能が埋もれていたらしくめきめきと実力が上がりました。攻撃の技は未熟なままですが、防御の技は天から才を与えられていたようです――僅か三年で敵の攻撃を受けても無効化する技術の最高峰である硬気功を習得するほどに。

それと同時に同級生からのいじめもなくなりました。別に拳法で復讐したわけでもありませんが、大人の一撃を跳ね返すだけの功夫を修めた僕にかかってこようとする根性はいじめっ子にはなかったみたいで」

「うん、感動的な成長物語だが、それと悟のM性癖とは関係ないよな」

悟はやれやれといった風情で正義を見つめた。

「だから、その硬気功の修行中に悟ったんですよ。いじめを見てみぬふりをしていた担任の先生の台詞『殴られるより殴った方が痛い』はどこかであなたも聞いたことがあるでしょう？　またその先生の口癖の『これは体罰ではない、愛の鞭だ！』とい名言も。

そして体で悟りました、愛って痛みを伴う物だ、と。その悟りを得てからはどんな攻撃にも笑って耐えられるどころか気持ち良くなって『もっともっと』と要求するようになりました。
そうなるとおかしな事に攻撃を続ける気力を失うようです。僕としてはノーガードでパンチもキックもウエルカム状態なんですけどねぇ。
つまり相手の愛の鞭を避けなければ、僕が攻撃をせずとも相手は勝手にスタミナと精神を消耗していくんですよ！　相手からは愛のエネルギーをもらい、そして僕は相手を傷つけることなく勝つ！　すばらしいと思いませんか！？」
「思わねぇし、その先生に騙されてるだろ。そいついじめをほっといただけじゃねえか」
「な、ガンジー師から続く無抵抗主義を馬鹿にするとは！　許せません、足腰が立たなくなるまでやってやります。さあ来い！　というより頼むから来て！　はあはあ、もっと攻撃をあなたの愛の鞭を僕に！」
「断る。お前のプレイに参加したくなんかない。だから息を荒げるな」

悟はサッカー選手が審判に詰め寄る時のように、ノーガードどころか背中に手を組んで胸で正義を押す。正義は完全に明後日の方向を向き、肘でぐりぐりと相手の腹を押し返している。
そんな正義と悟の間の微妙な緊張感に気づくことなく、千美はにこにこと二人を手招きをした。
「二人とも良く頑張ったね！　特製のスポーツドリンクをプレゼントだ！」
と両手に持ったグラスを渡した。そのグラスごと冷蔵庫にでも入っていたのかひんやりとして、ほてった掌に心地よかった。……中

身を気にしなければ。

「このスポーツドリンクってなんなんだ？　炭酸じゃなさそうなのにごぽごぽ泡が湧いてるし、蛍光色のピンクに刺激臭までしてやがる。これ本当に飲めるのか？」

「だ、大丈夫だ！　確か命に別状はないはずだ！」

「全然信用できねぇな」

正義がグラスを傾けて、ほんの一滴だけ中身絨毯にこぼすとそこから煙と刺激臭が立ち上った。

「何が大丈夫じゃー！」

「あ、あれ？　マウスの実験では成功したはずなのに！」

と千美は予想外の事態だったのか驚愕に目を見開いた。そして何かに気づいたかのように、あたふたと白衣の内ポケットからガラス瓶に入ったどろりとした緑色の液体を正義の持つグラスの中へと注ぎ込んだ。

グラスの中は一瞬激しく煙を上げて反応したが、すぐにおさまってみるとそこには透明の液体だけが残っていた。

幼女は幼い丸顔にやりとげた漢の表情を浮かべて「ふう」と額の汗を拭う。

「さあ、どうぞ！　今度こそＯＫだよ！」

「飲めるかー！」

正義はグラスを全力で投擲した。かなりのスピードで壁にぶつかったグラスは甲高い音を上げながら破壊された。「アルファ二十七号ー！」と叫びながら涙目で膝を突いた千美は、

「き、貴様！　まだあれだけしかない貴重な試作品を飲まずに投げ捨てるなんて、それでも人間か！」
「だったらお前が飲め！」
「少女に記憶を消す薬を勧めるなんて、何て外道！　一体何をするつもりなのか、番長部の部長として見逃せんぞ！　さあ、怜よこの正義って男の頭を斜め四十五度の角度で叩いた後、お前も悟もこのドリンクを飲むのだ！」

まさか自分達にまで飛び火するとは思わなかったのか、怜と悟まで表情を引きつらせた。特に怜は辺りをきょろきょろと見回した後で、何かを誤魔化すように叫ぶ。

「そ、そうだ！　正義をここに連れてきたのは、番長部の部活動を説明しにきたのだった。さあ、千美部長はドリンクの追加なんて忘れて、新入部員に説明を！」
「はあはあ、さすがに僕もあの薬は飲みたくないねぇ。というわけで部長は正義さんへの説明役をお願いします」

二人に駄目だしをされて千美は唇をかんでうつむいた。影になって表情は窺えないが「せっかくピーチ味にしたのに……」との恨み節がもれているが、怜と悟は華麗にスルーして正義に椅子を勧めた。
まだぶつぶつ呟いている幼いマッドサイエンティストを気にしながらも、正義はクッションの効いたソファに腰を下ろす。くつろいだ姿勢になって初めて自分の体が疲労していることに気がついた。
これは軽いスパーのせいではなく、転校とこの番長部とやらに連れてこられた精神的ストレスの為だろう。

なんとか精神的再建を果たしたらしい千美が改めて白衣に包まれた矮躯の胸を張る。

「とにかく歓迎するぞ正義！　君がいないと今度の番長戦争は不名誉な不戦敗になるところだったぞ！　その勇気に僕らは敬意を表す！」
「あ、ああ。ありがとう」
反射的に頷いた正義はずっと棚上げにされていた疑問点を口にだした。
「さっそくなんだが、その『番長部』とか『番長戦争』ってのがなにか教えてくれ」
「うむ。正義は基本的事情を知らないまま入部を希望したらしいな。手早く言うと『番長戦争を行う組織が番長部』ということになるのだ！　……ああ、ちゃんと説明するって」
正義にあわてるなと手で制し、千美は悟が目の前に差し出したグラスをあおった。
「まず番長戦争だが、これは各高校がトーナメント形式で戦う試合のようなものだ！　この結果が県内の各高校の予算配分や優遇措置などにかなり濃厚に反映されるのだ。……うむ、このジュースはピーチ味で美味しいな！」
「あ、それ僕がさっき部長から手渡されたヤツです」
悟が手を上げると、千美は口から飲みかけた液体をマーライイオンの如く吹き出した。
「何を飲ませるのだー！　僕の作った試作品のアル……えっと、試作品？　って何？　それよりここは何処？　僕は誰？」
「部長ー！　全然覚えてないんですか！？　ここはベルサイユ宮殿で、あなたはマリー・アントワネットですよ」

「え！？　そうなの！　じゃ、お腹が減ったからパンちょうだい」
「パンはありません」
「パンが無ければ乾パンを食べればいいじゃない！」
「災害時には正しい心がけかもしれませんが、ここに準備はしてませんよ」
「じゃあ、パンが無ければパンケーキを食べなさい！」
「惜しい、正解まであと少しです」

きょろきょろ辺りを見回す千美に大騒ぎを助長する悟。怜は正義に対してため息をつくと腰の刀に手を伸ばした。

「まあ、その、千美部長はお忙しいようだから私の方から説明させてもらうが、正義はこの部室内での事は秘密にできるな？」
「勿論だ。だから首筋から刀をどかしてくれ」
「物分りのいい新入部員で結構な事だ」

納刀する怜からは一片の罪悪感も無い。この部活では薬も抜刀も大した出来事ではないらしく、説明の方を優先するようだった。

「部長がさっき言ったように、校区内の高校における予算の分捕りあいや揉め事の決着なんかを『番長戦争』によって代理で決着させる訳だ。もちろん各校とも自分達が有利になるよう腕利きの生徒をその任に当てるのだが……」

怜は嘆かわしげにかぶりを振る。

「我が校の伝統に生徒の自主性を重んじるというものがあってな、他校がどんどん『番長戦争』における戦力増強に努める中で唯一放任していたのだ。
その為に『番長戦争』に志願する者達で『番長部』を作って部活

動という形で自主参加していた。だが年々部員は減少の一途を辿り、とうとう今年は必要参加人数を割り込み番長戦争に参加はおろか廃部まで覚悟せねばならなかった」

だが、と怜は表情を柔らかくして正義の肩に手を置いた。

「事情を知らなかったとはいえ、正義が来てくれたおかげで出場辞退という不名誉は回避できた。助かったぞ正義」

正義は苦笑いしかできない。きゃんきゃんわめいている二人の子供はともかく、この怜は本気で学校の事を案じて彼の入部を喜んでいるらしい。

自分には部活動などするつもりは一グラムもなかったが、それが番長のやるべき仕事ならば選択の余地はない。

「わかった、俺もその『番長戦争』とやらに参戦しよう」

正義の承諾に、怜は勿論のこと千美や悟までが嬉しそうに肩を叩く。

「ふむ、正義ならば必ずや助太刀してくれると信じていたぞ」
「正義さんなら熱い信頼で結ばれた仲間になれますよ。はあはあ」
「よく判らないけど僕も仲間が増えて嬉しいよ！　あ、ところでこのジュース飲まない？」

おそらくは忘れてしまって悪気がないのだろうが、千美に勧められた飲み物を丁重に断り話を元に戻す。

「だったら『番長戦争』ってのは学校対抗の喧嘩って事でいいんだな？」

「うん！　だいたいそんな感じだね！　普通の喧嘩と違うのはルールと人数が実行委員会で決まっていることぐらいだよ」

と正義の認識に千美が太鼓判を押してくれる。よし、ここはきっちりルールと人数を確認しておくべき場面だな。

「じゃあ、そのルールと参加人数を教えてくれ」

「ああまず『番長戦争』の参加人員だが、実戦部隊が三名に監督役やマネージャーも必要とされている。あいにくうちはお前をいれてようやく実戦部隊員が三人で補欠もなく、他の監督とマネージャーにマッドサイエンティストも千美に兼任してもらっているのだがな」

「にしし、ほら僕って百人力だからね！」

と自慢げに白衣に包まれた薄い胸を張る幼女。お前は現在進行形で記憶を失ってるんじゃないか？　と突っ込みたくなったが、何とかこらえた正義は「よろしく頼むぜ」と会釈をした。

その大人の対応がお気に召したのか、千美が悪戯っぽく目を細める。

「うん！　素直でよろしい！　たまに見た目だけで僕を見下す愚か者もいるけど、正義がそんな奴じゃなくて安心したぞ！」

「そいつぁどうもありがとうよ。で、次にルールってのはどんなのだ？　公式の試合ってことは、喧嘩じゃなくて総合格闘技みたいなスポーツ的な物になるのか？」

正義の疑問に千美はプルプルと首を振る。

「基本的なルールは相手を殺さないように処置――つまり怜の日本刀を刃引きしてるようなもの――をしてたら武器も目潰しなんかの喧嘩殺法も全部オーケーだね！」

いや、刃引きをしていようが峰打ちだろうが日本刀で斬りかかられりゃ当たり所が悪けりゃ簡単に死ぬぞ。学ランの下に再び冷たい汗をかき始めた正義に、怜が補足説明をする。

「ボクシングなんかは試合中の事故ならば責任は問えないそうだが、この『番長戦争』においては死者を出したら抗議する余地なく死に至らしめた高校が厳罰に処される。最悪のケースでは廃校処分もあるようだ、したがって戦争中に殺される確率はゼロに近い」

「そうなのか。ちょっと安心……いや死ぬ危険性が少ないのは判ったが、重傷なんかはどーなってんだ？」

怜と千美と悟が一糸乱れぬ動きで目を逸らす。まるで「右向け、右！」と号令を受けたような態度だ。

「全員そろってそっぽを向くなよ！　今まで怪我人ぐらい出たんだろう？」

「し、死者は出てないぞ。うん……目を覚まさない人もいたけど」

「そ、そうだよ！　僕もいるから、多少の怪我なら心配ないって！　脳さえ無事ならどうとでもなるよ！」

「戦場の傷なら男の勲章ですよ。できるなら僕が変わって苦痛を引き受けてあげたいぐらいです。きっと凄い悟りが開けそうな苦痛なんでしょうねえ」

必死に視線を合わせようとしない少女が二人と、別の世界を見つめてうっとりしている少年にこれ以上の追求は無意味だと感じずにはいられなかった。

「じゃあ殺傷兵器以外はほとんどが使用可能ってことかよ。ほとんどルール無用じゃないか」

「あ、でも勝利条件については厳格なルール適用があるんだよ！
一回クレームがつけられたらしくて、その教訓から弁護士を交えたルールブックが毎年配布されるようになったんだ！」
「そういえば、今年も速達とメールの両方で来てましたね。公平を期す為に毎回勝利条件が変更されているんですが、今年は確か……ビーチフラッグと棒倒しをミックスしたようなものでした。
とにかく敵陣にある旗を先に破壊したチームの勝利です。もちろんその邪魔をする相手チームとは戦闘になるでしょうが、例年通り殺さなければ問題無いようですね」

さりげなく法治国家としては恐ろしいルールを解説されたが、そこらへんを四捨五入すると何をしてでも敵の持つ旗を奪取すれば勝ちになるらしい。
番長になるための喧嘩は上等だと覚悟はしていたが、なぜこんなにハードなビーチフラッグに参加する事になっちまったんだろう。
正義はまだ戦いが始まってもいないのに頭痛を感じだしていた。

第三話　敵はとてつもなく巨大なようです（物理的に）

正義が番長部に入るのは早まったかと葛藤している間に、怜がさっさと話を進めていく。

「まあ、三人制武器ありバーリ・トゥード風のビーチフラッグということになる。元ネタはあるライトノベルからだというが、まあ単なる噂だろう」

「つまり相手の旗を奪取すればこちらの勝ちなんだな？」

「ああ、正確には『相手チームの旗を破壊すれば』勝利という事になっている。手に取るのがほぼ同時だと判定が難しくなるということで、旗の竿の芯にセンサーがとりつけられゼロコンマ一秒差でもどちらの旗が早く破壊されたかチェックできるそうだ」

なるほど、正義の頭の中で情報が整理されていく。この番長戦争は冗談事ではなさそうだ。

機材には十分にお金がかけられてルールも文句が出ないようにしっかりと定められている。

これは単に学校ごとの予算配分だけでなく、不良生徒の行動を番長戦争によってコントロールしようとしているのかもしれない。

スポーツなどでストレスを発散させる療法と、ほぼ同じ形態をより過激な喧嘩に近いルールで代行しているのだ。それにより暴動などの過度の混乱を無くしているのではないだろうか。

まあ、いいだろう。正義はサングラスを中指で押し上げながらそう判断を下した。

俺は別にこの学園で番長になりたかっただけだ。だとしたら、この『番長戦争』のルールにのっとって勝利することで番長に就任す

るのが一番無理がないストーリーである。
そう決めると、後は番長戦争に勝つことだけを考えるんだ。
ルールは理解した。他に必要な情報は、
「相手高校のデータはねぇのか？」
「それならここに……」
と言いかけて相手校の資料が挟まっているだろうバインダーを取り出そうとした怜の動きが停止した。
額に急に汗がにじみ「あ、やば」と口から洩れてフリーズしている。
一体何事だ？　正義が眉根を寄せていると、怜と千美が慌ただしく目配せをし合っていた。
「おい、どうした？」
「い、いや何でもない！　それより相手高校の番長達のことだが、確かウドの大木で気にする必要はなかったぞ」
「う、うん！　あいつらだだの木偶の坊だよ！　あんなの僕は認めないね！」
と必死に気にするほどの相手じゃないとアピールしてくる。彼女達の言動からはどうやら大柄な相手だとは推測できるが、ここまで隠されるとどうしても知りたくなるのが人情だよな？
「下手な隠し立てせずにさっさと教えろよ。どうせ本番で当たるんだから遅いか早いかの違いだけだろ」
と怜に資料を催促する。ここまでストレートに要求されても「むむむ……」と悩んでいる彼女の横から手が伸び、滑らかにバインダーが抜き取られた。

「はい、正義さん。これを見たからって尻尾を巻いて逃げないでくださいね」

いやみな口調で悟がバインダーを放り投げる。

正義はいささかムッとしながらも空中で受け取った。大した事を書いてなかったらへそを曲げてやるぞ。

そう決心して対戦相手である『栗林野(くりりんの)高等科出場選手データブック』の表紙を、内心大声で叫ぶとパワーアップしそうな高校名だなと突っ込みながら開いた。

その一ページ目の写真だけで、なぜ彼女達が正義に対戦相手を知られたくなかったかが判明する。

とりあえず一番気になった事だけは指摘しておかなくては。

「お前ら、まず訂正しろ。この相手は『木偶の坊』でも『ウドの大木』でもない。普通こんな奴らの事は『木製巨大ロボット』と呼ぶんだぞ」

「「ごもっともです」」

怜と千美が同意する。突込まれたのに二人とも笑顔なのは、どうやら正義がまったく戦意喪失していないと判断したからだろう。

二人が自分の事を見直したのはいいが、正義が加わるまでこの巨大ロボットを倒す作戦はどうするつもりだったのだろう。

そう尋ねたところ

「もののふに小細工は必要なし！　全力で斬るのみ」

「僕の発明にかかればあんなのは木偶の坊だって言ってるじゃないか！」

「あのロボットの一撃って……ああ、どのくらいなのか早く味わってみたいものですね」

……駄目だこいつら、早くなんとかしないと。正義の脳裏にはそんなフレーズが浮かんだ。
ちらっと写真を見ただけで強敵と判断できる相手に何一つ対策を立てていなかったのか。それならば無能すぎるぞ。

「そんな事言われても今回は参加できるかすらわかんなかったんだもん！」

千美の抗議に正義は思い切り唇をひん曲げる仕草で答える。すねた子猫みたいで可愛いのは認めてもいいが言い訳にはなっていないぞ。
二人の間の張り詰めた空気を柔らかくするためか、怜が口を出す。

「一応最低限の情報とそれを分析した物がある。まあ、実際に戦闘を目の当たりにしたのではない上、相手側も改良が進めらているだろうから鵜呑みにはしないでほしいが」
「ここにあるデータより上がってはいても、下がっている事はないってわけだな」
「うん。でも僕が分析して推測したんだから、大はずれって可能性はないよ！」
「そりゃ心強いお言葉で」

正義はパラパラと資料を流し読みしていく。とにかくまず敵チームの全体像を把握しなければならない。
三体のロボットに乗り込む敵チームの戦闘員は当然三人だ。その全員が三年生のチームらしい。最終学年まで番長戦争に関わってきたなら、コンビネーションが悪いなど虫のいい話は期待できないな。
個人的な戦闘能力においてもデータを見る限りでは三人とも格闘技の猛者で空手や柔道の段位持ちばかりだ。

本当にこんな木製ロボットに搭乗する必要あるのかね、こいつら？　普通に降りて戦っても強敵なのは間違いないんだが。

「で、めでたく正式に出陣が決まった今。こいつらとどうやって戦うつもりだ？」

「知れたこと。正面から打ち負かすのみ」

「決まってますよ。正面から打ちまくられるんですよ」

怜と悟は気勢を上げているが、正義の目には方向性はどうあれ両者とも間違えているとしか思えなかった。

「いや、この二人はともかく、僕も考えてはいたんだけどねぇ……」

残った千美は猫っ毛のショートカットをぼりぼりとかいて腕組みをする。小柄な千美がそんな格好をすると、がんばって背伸びをしているようでどうにも微笑ましい。

「どうして許可されたか不思議なくらいあのロボットは完成度が高いんだよ。木製とはいえ人間とは桁違いの防御力に加えて、その重量による攻撃力のアップは凄まじいんだよね。

破壊力だけをとれば今回の番長戦争でもトップクラスだろうね」

「そうだよなぁ、でかくて重いって事は戦闘ではそれだけで十分なアドバンテージだよな」

正義も小さな科学者の意見に首肯せざるえない。銃などの火力が認められていない直接戦闘においては、攻撃・防御の両面で重量が打撃力とヒットポイントに直結する。

ましてや一撃必殺などの致命傷を与える攻撃が制限されているこの場合は、なおさら不利が重くのしかかる。

正義が頭を捻ってもなかなか良いアイデアは浮かんでこない。同様に怜に千美と悟も「うんうん」と頭を抱えて唸っている。
やはり、今まで棚上げにしていた問題はそう簡単に解決はできないようだ。ここは議題を変更したほうがいいと正義は判断した。

「ま、敵チームの詳細な分析と攻略法は千美に任せるとして、俺達のビーチフラッグにおける戦術を決めないか？
その戦術における役割分担によってどんな訓練なんかが必要かも決定されるしな」
「そうだな」

真っ先に怜が賛成する。彼女はどちらかというと、情報分析などより戦いに直接関系する話し合いの方が性に合ってそうだ。
うむ、と一つ頷くと襟を正して正義に真っ直ぐな視線を放つ。

「正義の戦闘スタイルはまだ把握しきれていないが、悟と私の二人ならば役割ははっきりしている。
私が剣術を使った攻撃役で悟は硬気功で防御役に専念していた」
「まあ妥当だな」

正義にも納得できる体制だった。ＲＰＧ風にイメージすれば判り易いだろう、サムライスタイルで軽装備の怜がアタッカー役で硬気功で防御力抜群の悟が壁役だ。
この二人のコンビは役割分担が明確になっているが、ここに正義を組み込むにはどうするのが一番効果的だろうか。

「ふむ、こんな場合は正義は遊撃手としておくのが無難かもしれんな」
「ええ、そうですね。無理に僕達のように連携をとれと言っても時間がたりませんよ」

「そうだね。なら正義には僕の作った新兵器をプレゼントするよ！
一人離れて戦うのなら武器が必要だろうし……離れてればそれが自爆しても影響は少ないし」
「まあ、そういう事なら遊撃手になってやるが……千美、最後になんか呟いてたか？　聞こえなかったんだが」
「べ、別に何も言ってないアルね！」

明らかに挙動不審な謎の中国人になった千美はともかく、他の二人も正義がフリーポジションになるのには賛成だった。
そりゃ今から即席で三人のコンビネーションを合わせろ！　と無理を言われるよりは現実的だろう。
正義も下手をすれば囮の人身御供にされるかもしれんと、警戒していたのが無駄になり人心地がついた。
そこに怜から訓練のお誘いがかかる。

「さっきの模擬試合からして正義は打撃系の格闘技だな。無論それはかまわないのだが、木製巨人像を相手にするにはいささか不安ではないか？
もし、正義の都合が合うならばうちの道場で修業してみてはいかがだろう」

瞳から僅かな懸念の色を隠しきれない様子からして、正義の実力はまだ怜からして心もとないのだろう。
それが理解できるから、正義はサングラス越しにでも判別できるほどの仏頂面を作った。でもまあ、悪気があってのことではないんだよな。
手助けが不要だと印象付けるのに失敗した俺が悪かったんだ。仕方ないとりあえず、お誘いに乗ってみようか。
「ああ、修行させてくれるのはありがたいが、怜の実家は道場をや

ってんのか？　もし、和風の古流剣術なんかだったら俺の近代的なスポーツ的トレーニングを中心にした喧嘩殺法とは水と油だぞ」

正義の質問に怜は頷いた。

「確かにうちは剣術の看板を掲げているが、実態は先祖代々の剣を主体にした実戦における戦闘技術の集大成にすぎん。

要は流派を建てた当時に最も数が多く、はったりの効いた武器が剣だったから主要な武器に選んだだけなんだ。

実際最近は抜刀術の一環として銃の早抜きを教えてガンマンを育ててもいるぞ。その他近代の軍隊格闘技でも素手の格闘術においてもいろいろ教えることができるはずだ」

「銃の早抜きって、お前の流派の弟子は西部の賞金稼ぎ達かよ。大体居合いと早抜きって技術に関連性はないだろ。いや、それ以前に日本国内の道場で銃を扱うってのがそもそも」

とめどなく突っ込み続ける正義の首筋に、この日何度目かの冷たい感触がした。怜の日本刀がそこに当てられてたのだ。

「……話は変わるが、正義はマグナムの的になるのは好きか？」

「は？」

「ならば、正宗による試し切りの据え物役にでもなるか、うちの道場について口をつぐむかだ」

と銃殺刑か一刀両断されるか何も突っ込むなとの三択ならば、正義も死なない道を選ぶしかない。

「ＯＫＯＫ、とにかく刀を引いてくれ。でも、毎回怜に首に刃物を当てられるのはたまったもんじゃねぇな。ツンデレを気取っているのかもしれないがこれじゃ単なる脅迫だぞ」

「そんなつもりはなかったんだが……」

怜は口ごもるとそそくさと刀を仕舞った。やはり、刀を振り回しすぎだとの自覚症状はあったらしい。バツが悪げな表情を作っていたが、ぽんと手を叩いて笑顔を見せる。

「ええと、そう！　『あたしが日本刀で斬ろうとするのは単なる趣味で、別にあんたが特別な訳じゃないんだからね！』……って事で収めてもらえないだろうか」

「ああ、俺個人に刃を向けてるんじゃなくて、怜の日本刀の標的は無差別ってことだな。特定のターゲットを狙う暗殺者ではなく無差別殺傷のテロリストだと怜を思えと、了解した」

正義は納得したが、悟も千美も怜にかわいそうな子に対する曖昧に微笑んでいる。「あれ、間違ったか？」と頭を抱えている怜に正義は助け舟を出す。

「はいはい、怜についても道場もなんだかテロリストの教育キャンプと間違えそうだなとか、ちっとも思わないようにしますよ」

「ＨＡＨＡＨＡ、正義は面白い事を言うな。別にうちは銃と爆発物と毒と各種神経ガスの取り扱い方を教えている以外は、他の古流武術とあまり変わらない……はず……だぞ」

段々と自信が無くなってきたのか怜の声が小さくなっていく。そりゃそうだろう、銃や爆弾の扱いを教える道場なんかが普通のわけないだろう。

正義が真っ当な感想を抱いていると、白衣のマッドサイエンティストが口出ししてきた。

「うん！　全然おかしくないよ！　銃はともかく毒薬と爆発物は女

の子の嗜みだもん。僕なんか三つのころから名前を書く代わりに持ち物に全部自爆装置をつけてたぐらいさ。そのぐらい習ってない娘の方が変わってるんだよ！　僕は声を大にして主張するね、花嫁修業に爆発物取り扱いも入れるべきだと！」
「……千美の持ち物全てが危険物なのと、ここらへんの地域の価値観や危機意識が日本の常識外なのは了解できた」

正義の学ランに包まれた肩が落ちた。どうも転校する学校の選択をミスしたんじゃないかという気がして仕方がない。
振り切るようにリーゼントを振り、雑念を追い払う。ここまできたら尻尾を巻くのは男らしくない。怜の実家の道場で実戦的な訓練ができるとポジティブに考えなければ。

「それじゃ、怜の道場にお世話になるか。お手柔らかにお願いするぜ」
「お手柔らかという点では請合えないが、強くするのは任せてもらおう」

自信に満ちた笑みで余り豊かではない胸を叩くと、怜は正義の修行について保証した。

「うちには一日の使用で倍以上も強くなるという伝説の鍛錬器具がある。私にはどうしても使わせてもらえなかったが、正義ならば許可がでるだろう。
なにしろうちの父親が『男の友達を連れてきたらコレをさせてやる』と酒を飲んで笑っていたことがあったからな」
「へー、そんなすごい器具があるんだ。ぜひとも僕の参考にしてみたいね！　正義がどれほどパワーアップするか楽しみだ！」
「一日で成長するなんて、やはり命の危機まで追い込むんでしょうね。僕もそのトレーニングにお付き合いしたいものです」

そのうさん臭くも画期的な訓練とやらに、三者三様の賛辞が続いたが正義だけは納得できずに首を捻っていた。
怜が語った父親のコメントって、どう考えても娘に近づく不埒者を始末してやるって意味じゃね？

サングラスに隠されたごつい顔に涙を浮かべ、正義は心の中で愚痴った。
俺はただ「番長になる」と宣言しただけだぞ。なんでスーパーサイヤ人になれそうな特訓そしたり、木製巨大ロボットと戦ったりしなきゃいけないんだろう？
それは自業自得だとか、自ら墓穴を掘ったとかいうの単語を頭から消し去ろうと必死だった。

第四話　限界を超えろ！　肉を切らせて骨を絶つ修行

結局その日のミーティングは、正義が怜の道場に訓練しに行くのが決定された時点で終了した。

中々に密度の濃い転校初日だったと、廃墟のような地下通路を登りながら正義は疲労した頭で考える。

今日一日で転入した後は転がるように番長部に入部、木製巨大ロボットとの交戦決定、実戦武術の道場で特別訓練へご招待とイベントが目白押しだ。

なぜ「この学校をシメる！」と宣言しただけでこんな事態になっているのか不明だが、これからの毎日に胸が踊っている事も事実だ。

なにしろ『番長部』に入部し『番長戦争』などという大規模の喧嘩祭りに参加できるのだ、憧れていた格闘漫画やヤンキー漫画でも滅多にこれほどの連続イベントはお目にかかれない。

自分が本当に戦える男になれたかどうかを試すには絶好の舞台だな。

正義はそう一人合点していた。勿論この時、彼の脳裏には女性の怜や千美も参加しているため、番長戦争は男試しには不適切ではないか？　などという疑問は浮かばなかった。

翌日も正義は絶滅危惧種を保護するグリーンピースに匹敵する生温かい視線を浴びながらの授業を終え、ようやく放課後に番長部へと向かう。

あきらかに通常の範囲を逸脱している部員の三人に対し、クラスメートよりも親しみを感じている自分に「染まってきたか」と達観する正義だった。

「うむ、何やらお疲れの様子だが今日の修行は予定通りで問題ないな？　装置の使用許可を取ったが、正義の疲労が相当なものならば日程を変えるのも考慮するが」
「あ、このぐらい問題ないね！　それよりもその規格外の修行道具を早く見に行こう！　マッドサイエンティストとしての血が騒ぐよ！」
「ええ、多少の疲れなどスパイスのようなものです。それを乗り越えて初めて新しい世界が開けてくるのです」
「……千美は勝手に俺の体調を大丈夫だと答えるな。それに悟よ、俺は新世界を発見なんかしたくねぇぞ。
　ああ、怜、すまん。ちょっとこの番長部に慣れかけている自分にがっかりしてただけでコンディションは悪くない」

　部室のドアを開けた途端にかけられた言葉に、若干の疲れをにじませながらも律儀に正義は突っ込みを返す。
　部員のボケを無視せずにきちんと交流をとろうとする彼の姿が、今まで人員不足に悩んでいた部員達のテンションを上げるのに一役かっている事に今だ気がついていなかった。

「まあ、正義がいいのならば、すぐにうちの道場へと案内しよう」

　怜はソファから立ち上がり、その動きが帯刀の鞘をかすかに鳴らす。身のこなしは滑らかで隙がない上さわやかなのに、物騒な雰囲気を撒き散らしている。うん、やっぱり無意識の内に周囲を威嚇してるよなぁ。
　正義はぼんやりと考える。この番長部の三人の中で最も常識人に見える怜ですらこれだ。もしかして部員不足だったのってこの三人についていけなかったからじゃないのか？
　……まさか、それはないよな。

正義が自分の思いつきに戦慄していると、準備を整えたのか三人が「何を呆けているんだ、こいつ」と言わんばかりの表情で怜の道場への出発を促した。

「ああ、悪ぃ。それじゃ道場まで案内を頼むぞ」

こうして怜の家の道場で番長部は修行する事となった。

◇　◇　◇

「で、こうして俺は意味不明の道具を手足に付けられているわけだが、なぜこうなったのか説明してくれ」

高校の体育館並みに広い板の間で、正義は手足を肌が見えないほど範囲の広い、黒いゴム状の拘束衣らしき物でぐるぐる巻きにされている。

一見したところでは単に動きを封じられているようにしか思えない。

床に転がった正義からの、実に理に適った質問に怜が「それもそうだな」と頷いた。

「うちの流派は前も言ったように武器――それも刀が中心の戦闘技術だ。もちろん他の銃やナイフの扱い方も教えられるけれど、正義の得意な素手での打撃だけに特化しているわけではない。

だったら細々とした技を教えるんじゃなくて、身体能力を伸ばす方法をと探していたら、ちょうどこの特訓方法を思い出したのだ」

そう言って正義に巻きついている拘束衣を指差す。

「その黒いゴム状の物は電気刺激に応じて変化するようになっていて、スイッチ一発で急激に縮小するようになっている。その力はおそらく人間の耐久力以上、つまり正義は己の限界を超えて力を出して抵抗するしか無事にすむ方法は無い。
正義はその締め付けられる力に死なないように頑張るだけで、いつの間にか筋力がパワーアップしているという寸法だ」

淡々とした怜の説明に悟は「ちょっとやってみたいなぁ」と納得したようだが、他の二人はそうはいかなかった。

「これって近代的なトレーニングとしては意味がないんじゃないかな？　筋力ってのは最大近くの力を短時間で消費させることによって超回復でパワーアップするのに、こんな身動きのとれない状態でしかもタイミングや負荷は機械任せって科学的根拠はゼロだよ！」
「実にもっともな意見だな。俺が千美に同意するのははじめてかもしれん。さらに死なないように頑張るって怜の発言についてもスルーしなければなお良かったが」

眼鏡を光らせて反論する千美と唯一自由になる頭をこくこくと動かす正義。その二人の説得力に富む反対に対し、まず正義を鼻で笑うと千美の肩に手をかけた。

「部長、確かにこれは科学的とは言えないかもしれない。でもこのハードな練習のデータがあなたの物にもなるのだぞ」
「……確かに、手を汚さずに傍観してるだけでデータは丸儲け……。こほん、ちょっと僕も短慮だったかもね！　長い歴史を誇る武門の修練を若輩が邪魔するなんて不遜だったね！　ゴーだよ、ゴー！」

急速に百八十度ターンをきめた千美に正義からの泣きが入った。

「おい、いくらなんでも変節が早すぎるぞ。こんな非科学的な特訓をして怪我でもしたらどうするつもりだ？　代わりのメンバーはいないんだぞ！」
「むう、それも一理あるな」

意外なことに怜の方が心を動かされたようだった。

「やっと来た新入部員を壊すわけにも……」
「何を迷ってるんだよ怜ちゃん。ほら、ポチっとな」

細い顎に指を当てて眉を寄せた怜に対し、横から千美が「ポチっとな」の声に併せて怜の持つスイッチを躊躇なく押した。

「何を考えているかしらないけど、科学の発展に犠牲はつきものさ！　それに死んだりしないよ……たぶん」

実にマッドサイエンティストらしい意見を悪びれず表明した千美は、うめき声を上げ始めた正義を瞳を輝かせて観察する。

一方正義の方は冗談じゃ済まない窮地に立っていた。上半身に巻きつけられていた布が急速に縮んでいくのだ。
ぴったりとフィットしていた程度の圧迫感から、じわじわと体に食い込んでいく。
まず完全に身動きがとれなくなり、次第に筋肉に血が通わなくなる。さらに肩を中心とした関節から鈍い音が響き、肺から空気の入るスペースが奪われていく。
……本気でマズイぞ、これ。
正義の脳裏に危険信号がレッドで点滅し緊急事態を告げている。

流石にただならぬ気配を感じたのか、怜は一歩後ずさって表情を強張らせている。
だが、他の二人は頼りになりそうにない。
千美は携帯で正義の七転八倒を写しながら「おお凄い！」と口元を緩めている。悟に至っては「はあはあ」と先程より呼吸を荒くして羨ましげに見つめているだけだ。

そんな仲間のはずの奴らに視線だけでＳＯＳを送信するが、いっこうに救助してくれそうにない。
その間にもじりじりと正義を捕獲している布は収縮を続けている。
もはや正義の筋力による抵抗というよりも、骨格の頑丈さで潰れるのを防いでいると言うべきだ。もちろんこんな虐待まがいの行為ではパワーアップなど望むべくもないのを正義は知っていた。

「お、おい！　冗談抜きにコレをはずせ！　本気で怪我をしちまうぞ」

唯一の話になりそうな怜に対し、正義は苦悶の汗を流して叫ぶ。
一瞬不安げな表情になった彼女だが、長いポニーテールをばさばさと振るときつい目で正義をじっと見つめた。その真摯な瞳から読み取れるのは――『君ならきっとこの試練を乗り越えられると信じているよ』。

「そんな信頼はいらん！」

恐慌気味の正義を見かねたのか怜達からのフォローが入った。

「正義！　落ち着くんだ。落ち着いて体のきつい部分に集中するんだ。その部分に気と力を集めて制限時間を耐え抜けば、きっと大幅なパワーアップになる」

「正義！　落ち着くんだ。正義が頑張った分だけ貴重なデータが取れるんだ！　もう少し――具体的には心拍停止寸前まで粘るんだ！」
「正義！　落ち着くんだ。落ち着いて痛みを受け入れるんだ。そうすれば痛みの中からこみ上げてくる快楽を享受できる！」

約二名ほど全く役に立たないアドバイスを放っているが、助けてくれる様子はゼロだ。
何とか自分だけの力で乗り越えるしかないようだな。正義の腹がようやく決まった。
圧迫されて浅くなった呼吸を鎮め、下っ腹の丹田に力を込める。
そこから伝えられるエネルギーを背骨から手足の末端まで循環させていく。我流ではあるがそれなりに理に適った正義の自己調整法だ。
思わぬ抵抗に上半身を締め付ける布の勢いが停止した。

「ほう」
「へー」
「はあはあ」

観察していた者達は三者三様ながら正義の呼吸法と頑丈さに興味を持ったようだ。
だが、正義にはそんな事を気にかけている余裕はない。ほんの少しの余裕ができたとはいえ現在進行形で締め付けられている事に変わりはないのだから。
強く歯を噛み締めつつ両腕にパワーを集中させる。
やはり拘束から解放されるには、腕を開く動きで布を破るのが効率的だろう。
呼吸を止めて腕を全力で開こうとすると、強力な抵抗の後にじわりじわりと拘束が緩んでいく。
周りの今一頼りにならないチームメイト達も「ほう」と感心のう

めき声を上げている。

もう少し、もう少しでこの拘束から抜け出せる……。

正義のその内心を見通したかのように締め付ける力が大幅にアップした。先程までの締め付けの力が子供の蛇だとすると、今回は巨大アナコンダ並みの強烈さだった。

「正義、大丈夫か！？」

「正義、データは大丈夫か！？」

「正義、目覚めるまでもう少しだぞ！」

流石に三人とも異常に気がついたのか険しい表情を見せている。二名ほどなにを期待しているのかわからない人物もいるが、彼女達が見守っている中で正義が雄たけびをあげてのけ反った。

学ランと拘束具からのぞく首筋の筋肉には血管が浮き出し、顔は汗とほこりにまみれサングラスが外れかかっている。立派に突き出していたリーゼントさえセットが崩れていた。

正義は外見を気にする余裕もなく全身のパワーで抵抗していた。

喰いしばった奥歯が嫌な音を立て、肩の関節のきしみと不気味なハーモニーを奏でる。

――もう限界だ。

正義の理性がそう判断した瞬間に汗で滲む視界に、両手を胸の前で組み合わせて心許ない怜の顔が映った。

似合わない表情しやがって、そんなに俺が心配ならこんな特訓をさせるなよ。

正義が愚痴りそうになったた時にスイッチを入れる前の怜の言葉が蘇った。『正義は己の限界を超えなければならない』だったよな。

なるほど、こんな事を考えていられるって事はまだ限界じゃない

って事だな。だったらまだまだ俺はやれるはずだ！

気合を入れなおし、さらに腕を動かそうとすると先程よりも可動域が広がった。アドレナリンが出ているのか圧迫感を感じない。酸欠になりかけていた肺に笛のような音を立てて空気が流れ込む。

もう少し、もう少しだ。

正義は残った全ての力を注ぎ込み――己の限界を突破した。

◇　◇　◇

「――左腕尺骨の亀裂骨折、全治二ヶ月ですね」

レントゲンを貼り付けて見せてくれた医者が「過度の運動による疲労骨折です」と断定的に診断を下した。

そりゃ左手の肘と手首の中間ぐらいの骨をきれいに折っちゃったんだから、完全復帰までそれくらいはかかるかなぁ。

リハビリも入れればそのぐらいだろうと納得した正義は、もう一つ重要な事を思い出した。

「番長戦争はいつだったっけ？」

つきそっていた怜は無表情の中に焦りを含んだ声で答えた。

「あとちょうど一ヶ月だな」

「……」

「……」

第五話　鳩を出すのはやめましょう

「父上、少しお聞きしたい事があるのですが」
「おお、なんだい？　怜ちゃんの質問ならパパ何でも答えちゃうぞー」

怜が味噌汁を飲み干して、机にお椀を音も立てずに置いた。綿式家の朝食は和風の御膳でしっかり量を摂る為に、随分と時間的には早い習慣である。
そんな部活をしていない高校生ならばまだ夢の中の早朝に、眠気さえ欠片も見せずに怜は口を開いた。

「以前お聞きした『男性専用緊縛型強制限界突破器具』ですが、使い方を誤ると怪我の危険性もあったのでしょうか？」
「なんだそれは？」

目を丸くする父親に怜は気色ばんだ。

「ほら、従姉殿の結婚式の二次会で少しお酒を過ごされた時、私の男友達関係をしつようにお尋ねした後で教えてくださったじゃありませんか」
「ああ……そんな事もあったな」

遠い目でその二次会を思い出している父親にもう一度問いかける。

「それであの特訓器具は使う時には、拘束衣を着せてスイッチを押すだけでしたよね？」
「なんだ怜ちゃんはあれを使うつもりなのか？　あんな半分冗談で

作った装置なんで実際には使用禁止だぞ。あれはどちらかというと拷……ごほん。お仕置きのためのものだからな。
素人が使ったら間違いなく怪我しちゃうぞ……あれ？　怜ちゃん、なんで頭を抱えているの？」
「な、なんでもありません」

怜は額を押さえていた手を外し、ふらふらと立ち上がった。

「用事を思い出したので、もう登校しますね」
「ああ、怜ちゃん気をつけていくんだよ」

いつになく精彩をを欠いている愛娘を、父親は気遣わしげな視線で送り出した。

◇　◇　◇

「……というわけで全治二ヶ月って事になっちまった。入ってそうそう怪我で訓練をリタイアってのも情けねぇが、ま、俺一人の責任ってもんでもねぇしな」
「何を言ってるんだよ！　全部正義のせいじゃないか！　ピンチに陥ったらパワーアップの一つもできないなんて……やる気あるの！？」

かなり無茶苦茶な文句をつける千美の頬を正義は無事だった右腕でつねる。
ダメージは左腕に集中していたとはいえ、まだ右手も動かすと微かに痛んだ。正直、今日ぐらいは部活動を休もうかとも考えたが、教室でのパンダ以上の注目度に負けて部室へ逃げ込んできたのだ。

さすがにこの部室内の方がはるかに居心地はいいが、千美にここまで言われる筋合いはない。

「お前がいきなりスイッチ押したんだろうが！　責任をとれとまでは言わんが、もう少し罪悪感を感じてもいいだろうに。

それにしても餅よりよく伸びるな、ほーら、ほーら」

「その手を離せー、無礼者ー！」

「正義、千美をつねるのをやめるんだ！　そしてどうせなら僕の頬を……はあはあ」

思わずドン引きした弾みで手を離してしまった正義は、しみじみとご褒美を期待している悟を眺める。

「お前って本当に全方位型で弱点なしの変態だな」

「いやあ、それほどでも」

「誰も褒めてはおらん」

なぜか顔を赤らめた悟るの頭を軽くはたいて怜が登場した。

いてて、と嬉しそうに頭を押さえる悟に処置なしと肩をすくめて怜は正義の具合を観察するかのように目を鋭くした。

「おいおい、この部室にきている時点でそれほど大した怪我じゃないのは判るだろう。まあ、次の番長戦争には厳しいがどうにかするって。

確かにあの修行道具はどうかと思うが、失敗したのも俺が未熟なだけで怜には文句はないぞ。だからそんなに気にしないでくれ」

「……そう言ってくれると助かる」

複雑な表情で怜が頭を下げた。その上に「あ、これはお見舞いだ」といそいそと果物の入ったバスケットを手渡ししてくる。正義が懸

念していた通りに彼の怪我に責任を感じているようだ。

「だから、気にするなって言ってるだろ。わざわざ準備してくれた道具を使いこなせなく怪我するなんて、こっちが謝らなきゃいけないぐらいなんだからな。

貴重な道具を使わせてくれた怜にむしろ悪いことをしたかなって……おい、なんで胸を押さえて暗い顔をしてるんだ？」

「い、いや、なんでもない。そのほら、リンゴをウサギさんにむいてやろう。頼むからむかせてくれ。だから、もう正義のほうこそ謝らないでくれ」

持ってきたリンゴを綺麗な居合いの型で一振りごとにウサギの形に切り裂いていく怜の姿に、千美は訝しげに首を捻る。

普通リンゴなどをうさぎにするというのは、皮を耳の形に残してむいていくものだが、怜は彫刻のように刃で果肉を削りリアルな造形のウサギを作っていく。むいているというよりもリンゴをその形に削っていくのだが、目は皮を残して赤くしてある点などが無駄に凝っていた。

だが、どうもいつもの怜のキャラクターには似合ってないようだ。

「怜はどうしたんだい？　まるで捕まりそうな犯人が名探偵に必死で媚を売っているみたいだよ」

「それは言いすぎだぞ！　怜がそんな卑怯な事をする女性じゃないのは千美だって知っているだろ！」

悟が珍しく語気を荒げて千美を叱った。怜の清廉潔白さはこの番長部でも周知のようだった。いかにも気品のある女剣士というのが彼女のイメージとして相応しいと正義ですら納得する。

千美もさすがに言葉が過ぎたと感じたのか素直に怜に謝った。

「怜、ごめん！　怜が見たこともない態度をしてたからちょっと口が滑っちゃった。怜がそんなに汚いまねするはずないの知ってたのに、本当にごめんね！」
「……千美がこんなに真面目に謝ってるのは初めてだな。俺に対する謝罪がないのを考えるとかなり複雑だが、怜も許してやれよ……だから、なんで怜は心臓の辺りを押さえて『すまん』って口走ってるんだ？　謝るのはこっちの方だろうが」

なぜだか千美や正義が口を開く度に雰囲気が暗くなっていく怜をだった。
気遣う正義に「大丈夫だ……お願いだから私の事は気にしないでくれ。ああ、ウサギは一匹じゃ寂しくて死んじゃうんだった」と、悲愴な表情で日本刀を振るってうさぎさんを量産していく彼女に周りの番長部員も困惑気味だ。

雰囲気を変えようとどんどん増えていくうさぎファミリーを見ないようにして、正義が千美に左腕のギブスを差し出す。

「千美の技術でなんとか回復を早められないか？　どうにかして一ヵ月後の本戦にでたいんだが」
「うーん、僕も色々考えてはみたんだよ。なにしろ正義がいなくちゃメンバー不足で試合放棄になっちゃうし、うちの学校で募集しても正義が転校してくるまで誰も入部しようって子はいなかったからねぇ。
正義が復帰してくれないと部としてもこまるね。そこで……」

と千美はどこかで見たようなビーカーから異臭を漂わせる液体を掲げた。その蛍光色の得体の知れない液体からは異様なオーラが漂っていると正義には感じられた。
前回の千美ご自慢のピーチ味のドリンクを思い起こし、さすがに

腰が引けてゆく。

「また怪しげなドリンクを……」

「ち、違うよ！　これはそう、こんな事もあろうかと準備していた『骨成長促進剤』だよ！　この薬さえ飲めば骨折ぐらいの怪我なら一晩で完治するよ。さあ、正義。今すぐ一気飲みするべし」

千美は「ふっふっふ」と含み笑いを浮かべてビーカーを前にしてじりじりと間合いを詰めてくる。明らかにその姿は薬を勧める医者ではなく、人体実験を行おうとするマッドサイエンティストだ。

そんなどこか別の世界を覗き込んでいるような視線の千美から、一定の距離を保とうと正義も目立たないように後退していく。

「本当に骨折が一晩で治るのか？」

「うん！　保証するよ！」

逃げ腰の正義に向かって、千美は自信たっぷりの笑顔で頷いてくる。その薬の効果に対する信頼には一点の曇りもないらしい。

だがそれでも正義の胸から不安は去るはずもなかった。

――この骨折を一晩で治せるのに千美はお墨付きを与えた。しかし、その後の保障はしてないよな。

「治せるというのは判ったが、副作用はないんだろうな？　本番は一ヵ月後なんだ、もしも妙な影響がでてデメリットが大きいならその薬は飲めないぞ」

「だ、大丈夫だよ！　……きっと」

千美はさっきまでの確信に満ち溢れた態度から、急にきょろきょろと辺りを見回す仕草になってけして正義と視線を合わせようとしない。

うん。つまりこの薬は効果は抜群かもしれないが、副作用はもっと大きいってことだな。正義は一ヶ月で骨折を完治させる薬なのに病院で処方されずに千美が持っているのにようやく納得がいった。
そりゃこの番長部部長が口ごもるような副作用のある薬なら、どんなに効果があっても認可される訳がない。

内心でマッドサイエンティストを極めて真っ当に評価しながら、あわあわと挙動不審な千美の手からビーカーを奪い取る。
何を勘違いしたのか「さ、一気にぐいっと！」と顔を輝かせる千美に突きつけた。

「副作用がないなら試しに千美が飲んでみてもいいよな？」

正義に向けられたビーカーが、まるでメデューサの首だったように千美は硬直した。ポーズボタンを押されたゲームの登場人物並みの静止状態に「やりすぎたか？　いや、そんなのを俺に飲まそうとしていたのか」と怒りが湧き上がってくる。
その怒った雰囲気をサングラス越しにでも悟ったのか、千美は強張った顔に涙を浮かべた。

「やだよぅ。これは骨の成長速度を促進させる薬だから、飲んだりしたら骨折も治るけど同時に関節ごとに骨も伸びちゃって身長がプラス二メートルされるんだよ！　僕の背を伸ばす研究結果の一つだけど、あんまり効果がありすぎて実験もできなかったんだ！
動物実験しようにも、マウスでさえ最近は僕のあげる餌を食べてくれないし……、せっかくの人体実験のチャンスなのに僕に飲ませようとするなんて信じられない！」
「いや、信じられねぇのは俺の方だよ。そんな怪しげな薬を人に勧めてたのか」
「だって明日には骨折がくっついてるんだよ！？　身長が二メート

ルもプラスされてるんだよ！？　高身長はもてる条件なんだよ！？」
「だったら千美が飲めばいいだろうが」
「僕は怪我してないし、飲んだら身長が三メートル五十になっちゃうじゃないか！　女の子にそんな身体的特徴をあげつらう事言うのはセクハラだよ！」

背中の毛を逆立てた猫のごとく逆切れした千美がセクハラだと騒ぎ出す。いや、最初に飲めって言ったのはお前だとか、正義なら身長四メートルを超える巨人になっても良かったのかなど抗議したいのは山々だったが、正義はぐっとその憤りを抱え込んだ。
泣く子には勝てぬとの格言通りなのか、なぜか他の部員二名が絶対零度の視線を正義に投げかけていたのだ。
理不尽な状況におちいった正義は、ひくつく表情筋をなんとか制御しながらおだやかに語りかけた。

「泣くなよ、別に怒っているわけでも絶対にその薬を飲めと強制している訳でもない。ただ俺が飲んで巨大化するのはちょと無理だと思っただけなんだ。だから俺をジャイアント化させるその薬は今回は無かった事にして他の手を考えようぜ」
「……本当に怒ってない？　僕に飲ませない？　ちょっとでいいから飲む気ない？」

逆上していたはずの千美が一転して涙を滲ませて胸の前で手を合わせ上目遣いで尋ねてくる。いや、身長差の関係で千美はほとんどいつも上目遣いになっている為に慣れてはいるが、それでも可愛い幼女による破壊力は抜群だ。
普段のボーイッシュな態度からかけ離れた可憐な態度に、怒りが正義の腹の内から消滅していった。

「ああ、本当に怒ってもいないし無理に薬を飲ませたりもしない。

……そして俺も絶対に飲んだりしない」
「ちっ」
千美は潤んだ瞳をすぐに乾かして舌打ちする。合わせた手を外すと猫っ毛のショートカットをぼりぼりとかきまわす。
「あー、じゃあどうしようか？　今から正義の代役を立てるのも無理なんだよね。なら、少しでも戦力の減少を食い止めるためには正義の怪我の影響を少なくしなきゃいけない。
ここまでは異論がないよね。そこで提案なんだけど正義が千美印の薬を飲むのが嫌なら、その骨折した左腕に『ギプスロケットパンチ』を装着するのはどうだろう？」
正義は無意識でギプスに守られている左腕を右腕でかばいつつ、千美に疑問符を投げかける。
「ギプスロケットパンチってこのギプスを飛ばすのか？」
「うん、そうだよ。ドン！　ピュ―って！」
オーバーな仕草で爆音と空気を切り裂く音を描写する。このマッドサイエンティストは本気で折れた腕をロケットの発射台にするつもりのようだ。
「それ本当にやったら俺の左手は反動で酷いことになるんじゃないか？　ただでさえ怪我してるんだぞ」
「……あ、第二案としては『仕込みギプス』とかはどうかな？」
千美は何かを誤魔化すようなそぶりで第二案を出す。おい、本当に俺の怪我した手のこと気にしてなかったわけじゃないよな？
仲間への信頼が削られていくのを感じながらも正義は答えた。

「仕込みギプスって……まあ、仕込み杖や鞘に入った日本刀がお構いなしならルール上の問題はないわけか。
だったら中に何を仕込むかが思案のしどころだな。千美に何か腹案はあるのか？」
「えーと、ドリルとかいいね！」

笑顔で削岩機を進めてくる幼女に左腕だけではなく頭痛も感じる正義だった。大体俺はドリルなんぞにロマンを抱く科学者ではない。
すると怜がウサギを量産するのを止めて口を出してきた。

「基本的に仕込み武器というものは隠し武器なんだから、相手の意表を突くものでなければわざわざ隠している意味が無いだろう。
そういう点を考えて――鳩とかウサギを出すのはどうだ？」
「俺は手品師か！　というか怜はそんなにウサギが隙だったのか！？」

正義の突っ込みに怜は微かに口を尖らすと「それなら正義は何を仕込み武器にするんだ？」と追求してくる。
ギプスの中から鳩やウサギを出すという意見を否定されたのがかなりご不満のようだ。正義からすれば「鳩なんかを出して受けをとった後はどーするつもりだ？」と尋ね返したい所だが、ここは大人になるべきだと自制する。
何より、隠すのならこれだろうというアイデアを持っていたからだ。

「俺のギプスには旗を仕込んでくれ」
「それもやっぱり手品だよ！　鳩もウサギも万国旗も手品師がシルクハットから取り出すようなのは駄目ー！」

千美の科学者のロマンも怜の小動物も正義のかなり真面目な提案も、全部まとめて却下されそうな雲行きだった。

第六話　俺の左目が疼くんだ

「――で君の意見はどうだね番長部部長殿」

縁なし眼鏡が冷たい印象を与える硬質の男が尋ねる。その声もまるで人間味や温かみを感じさせないものだ。

問われた番長部部長と呼ばれた体格のいい少年は気圧されたのか、慌てたように立ち上がって答えた。

「はい。先程報告のあった新入部員の件ですが、病院からのリークによると骨折で全治二ヶ月は間違いないそうです。

あの野際学園が番長戦争を辞退せずにエントリーしたのは想定外でしたが、敵としては実質二人。巨大ロボット『木人号』を擁する我が校が気にする事は無いと考えますが、いかかでしょうか会長」

「ふむ」

番長部部長の自信に満ちた報告に会長は腕を組み椅子に深く背を持たれかけた。

どことなく失望したような面持ちで、彼の放つ冷たい雰囲気が更に強まった。

「確かにかの転入生『折葉　正義』君が左腕を負傷したのは事実だ。しかし、それだけで勝利は確実と警戒を緩めるのはよろしくない。

元々戦わずに済んだはずの敵と一回戦を戦わねばならなくなったのだよ、敵を過小評価して足元をすくわれるのは愚か者のすることだ。

部長が折葉君の加入を察知したならば、負傷の情報だけでなくもっと詳細な彼に関するデータも調べておくべきだったな」

組んだ腕を解いて引き出しからファイルを取り出した。表紙にはでかでかと『折葉　正義データファイル』と大書してある。

「うちの報道部の精鋭が作成した、転校前の高校や中学での情報だ。残念ながら副会長の楽観とは裏腹に軽視できる人物でもなさそうだな。

調べただけで小さいながらフルコンタクト空手とアマチュアボクシングの大会で優勝経験がある」

「本当ですか！　もしそんな人物なら噂でも聞いたことがありそうなものですけど」

「その質問に対する答えまで書いてある。彼は高校入学以来一切の対外試合に出場していない、それが名前が知れていない理由だろう。

その理由も判明した。彼はボクシングの練習中に事故で左目を再起不能――いや少なくとも公式試合の許可が下りないほどの後遺症を患っているのは確認できた。

彼がサングラスを愛用しているのも左目の異常を隠すため。右利きなのにサウスポースタイルに変更したのもできるだけ視野を確保しようとしての行動だろう」

だが、相手に弱点が知られていればそれらの小細工も無駄になる。そう会長は弱点を調べられなった部長を突き放しながら冷ややかに断じた。

「折葉　正義君と対峙した部員は彼の左サイドから――僕達からしたら右手側の死角から攻めるように通達を徹底しなさい」

告げられた番長部部長の顔にははっきりと読めるほど『そこまでしなくても』と書いてあった。その表情に一瞬眉をひそめる会長は誰にも聞こえないように「だから貴様らは脳味噌まで筋肉なんだよ」

と一人ごちる。やはりここは彼らには内密に幾つか手を打っておくべきだ。
すぐに冷徹な仮面を被り直した会長は、視線を目の前の少年から正義と他の番長部部員のファイルに移した。
「他の三人のメンバーも一癖ありそうな連中ばかりだ。いくらうちが開発した『木人号』が優秀だといって手を抜くべきではない。こちらからも幾つか手を打たせてもらうが、君達は知る必要の無い事だな。
では、これからも『番長部』の一層の努力を期待する。生徒会としての意見はそれだけだ」
九里林野高等科生徒会長――浦賀（うらが）　有人（ゆうと）は、相手の反応など一顧だせず要求を突きつけた。

◇　◇　◇

「それで正義は本当に出場できるのかい？　土壇場に来て『やっぱ無理でした』なんて言われたら、僕の開発した薬品を一気飲みさせるからね！」
「……大丈夫だ。この怪我が治らないでも出場はするから安心してくれ。そしてその極彩色の薬もどっかにやってくれ」
何べんも自分の意思を確かめる千美にいささか辟易して正義は右手で頬をかいた。
まだ部員になって日が浅い正義の覚悟を危ぶんでいるのだろうが、彼にとっては余計な心配に過ぎない。そんなことより、治療薬か武器を開発しろと思うが口には出せない。

もし千美にそんな言葉を聞かれようものならば、喜んで正義を被験者にした開発実験が始まってしまうことを理解していたからだ。

そんな心配性な彼女の不安を払拭するために、部室の中に他に誰もいないのを確認して口を開く。

「この程度の怪我で諦めるぐらいなら、この左目をやっちゃった時に戦う事を諦めるぞ。それに大体まず番長になるのが激戦区と言われるこの学園にも転校してこないだろ」

ふっくらした頬を引き締めた千美は僅かにうつむくと下唇を噛んだ。

「その、やっぱり正義の左目は視力が戻らないの？」

「まあ、何とかぼんやりと形を感じ取れる程度だ。だが、それよりまずいのは光に過敏になりすぎてサングラスが手放せねぇ事だな」

ますます深く顔を伏せる千美に、正義の方が悪役な雰囲気になってくる。

「おいおい、千美はうちの部活のチームドクターでもあるんだから俺のカルテぐらい手に入れてだろ。そんな『聞いてびっくりだよ！』って驚いたような顔しないでくれ。それにお前に作ってもらったサングラスは、薄型・軽量で光も銃弾もしっかりガードって優れもんだったぞ。

これだけでも十分助かってるんだから、今更同情するよりは次の戦いをどうするか建設的に考えようぜ部長さん」

「うん」

千美は俯いたままこくりと首を縦に動かした。こうしているとま

るっきり小学生だな。
そう正義が油断したのを見計らったように、千美は顔を伏せたまま眼鏡だけを不気味に光らせた。
「うんうん。ポジティブに考えるよ。そうだよね、その左目も見えなくて元々ならそれ以上どうなったって……。正義、左目の改造させてくれないかな、義眼からビーム発射とかに興味ない？」
「お断りだ！」
正義の拒否に千美は「ちっ」舌打ちした。無駄に前向きというか余計に暴走しだしたような気がするが、正義にとっては負傷した目を気遣われるよりもマッドサイエンティスト特有のうずうずした反応の方がはるかにマシだった。
転校する以前の高校では部活中の事故で負傷したという事もあり、学校中から腫れ物のような扱いだった。
そんな周囲の環境も自分に刻み込まれたトラウマも、全てをリセットする為に激戦区と名高いこの校区を選んだのだ。
多少、いやかなり正義の想像とはかけ離れていたがこれはこれで自分を取り戻すには良い環境だ。
目が見えないのは不利ではあるが、健常者に絶対にかなわないわけでもない。表向きの理屈ではそうなっている。だが、現在の格闘技のルールの多くでは正義は参加することすらできないのだ。
今まで積み上げてきた努力の全てが無に帰すのが正義には我慢ができなかった。
隻眼の柳生　十兵衛は強かったんだろう？　じゃあ、俺も片目で弱いかどうか試してくれよ！　そう叫んでも誰も相手にしてくれない。

自分の視力の問題で負けるのは仕方がない。だが、参加さえ許さないルールに敗れるのは御免だった。
重度の網膜剥離を患った人間に戦いを許可しない。そういう条文の正しさは正義にも良く判る。ただ、その正しさの範囲内に正義がいなかっただけで、それが彼の譲れない部分と衝突したのだ。

正規のルートがないなら裏道を探すまでだと隻眼のハンデを補う方法を考え、ストリートファイトで実践してきたのだ。そうやって戦えると自信を取り戻してこの高校へとやってきた。今更、番長戦争が怖いからと逃げる選択肢は正義には無い。
元々は恵まれた体格と才能に頼ったパワーファイターだった正義が、小細工とフェイントを多用するサウスポースタイルに変えるまでどれほどの汗を流した事だろうか。
あの時ほど不安で未来があるか判らない修行を乗り越えて戦える場に立った今、実戦の相手が巨大ロボットだろうが自分の腕が折れていようが彼にとっては些細なハンデにすぎない。
……いや、些細ってのは言いすぎだが、正義の頭の中ではこの状況でも勝つ確率を最大限に高める作戦を構築中だった。

「でも、正義の左目の事を怜にも悟にも伝えておかなくても本当にいいの？」
「ん、ああ、コンビネーションを重視する競技ならともかく、今回の作戦では俺は遊撃の役割だからな。こんな直前に左手の骨折だけじゃなく、左目までハンデをしょっているとバレたら不安にさせるだけだろう。
ただでさえ勝算は薄いのに試合中に俺の心配までさせたらまともに戦えないぞ。
右目だけでも戦えると証明するには、現実に今回の対巨大ロボット戦を勝つのが一番だ。勝って『実は片目が見えねーんだけど、ちゃんと戦えるし勝てただろ』と二人に説明しよう。そうして初めて

ハンデがあっても仲間と認めてもらえるはずだ」

正義にとって戦う前に左目の事を知られるのは、敵には勿論の事だが例えチームメイトであっても避けたかった。

自分が未だに戦えるのかを確かめるために試合に出るのに、敵や味方がハンデにより攻撃や指示に躊躇があっては意味が無い。あくまで自分が一人のファイターとして通用するかどうかが知りたいのだ。

「それにしても、左手左目が使えないとなると問題山積みだよ。まして相手が巨大ロボットだなんて……！　く、できるならこちらもロボットで対抗したいぐらいなのに、時間と予算が許さないのが恨めしい！」

「いや、いきなりロボットのパイロットになってくれと言われても、サードチルドレンでもない俺は断るけどな」

一応パイロットへの着任は拒否してから、正義は疑問を投げかける。

「今度の敵の巨大ロボットって、番長戦争のルールに抵触しないのか？」

「うーん。あれって本当にぎりぎりでグレーゾーンに留まってるんだよね」

舌打ちした千美が眼鏡をかけなおして咳払いを一つ。まずい、長くなりそうだと逃げ腰になりかけた正義に講義を始めた。

「この番長戦争における武器のルールは結構定義が曖昧なんだよね。『己の力によらずして敵に戦闘不能なダメージを与える物』と『己の力によらず行動可能な物』以外の武器を一つって事だけど、解釈

のしようでどうとでもとれるから常識の範囲内で審判が判定するんだよ。
まあ、簡単に言うと銃火器や自動車なんかの引き金やを引いたりアクセル踏むだけで殺傷能力を持つのは駄目って事だよ。
どうしてなのかは諸説あるけど、たぶん主催者の趣味って説が今のとこ有力だね。

で、あの巨大ロボットは意外かもしれないけれどそのルールを破ってないんだ。
納得いかない顔しているね。ボクも初めはそーだったよ、あいつらだけがえこひいきされているんじゃないかと文句がでたよ。
ところでえこひいきをする教師とかって、エコひいきって書くとなんだかとっても地球に優しい先生っぽくなって何だかおかしいね！

あ、ごめん話が逸れたね。
とにかく開示された情報によるとあのロボットは動力がエンジンなんかじゃないみたいなんだ。だから名目上はロボットじゃなく、カラクリ人形に区分されているんだって。そして操縦は手動だからルール上はぎりぎりセーフって見解なんだってさ」

じっと耳を傾けていた正義が不服気に口を尖らせる。
正義にとっては腕試しの場と考えていたのが、スーパーカラクリ大戦になったのだ。「そりゃ詐欺だろ」と文句を言いたくなるのも当然だろう。

「だからってあんなに巨大で複雑なギミックがＯＫなのは納得いかないぞ」
「大きさは関係ないよ。刀を例にすると刃引きをしていれば短刀でも斬馬刀でも同じ扱いだしね。部品の数にしたって日本刀を分解すると幾つになるか知ってる？　部品の名称だけで三十もあるんだよ。

もっと単純な例だとボクシンググローブを武器に選んだ人もいたけれど……ボクシンググローブは両手で一組でしょう？　まさか武器は一つだからグローブ一個で片手だけって訳にもいかないし、そこらへんは常識で判断するんだ。
　そしてあのカラクリ人形も同様に、部品が組み合わされて大体一個とみなされているんだ。この辺の大会本部の判断には相手校がなにやらリベートを渡したとか噂が立ったけど、結局未確認なんだよ……。
　でも、そこから幾つか興味深い事実が推測できるね！」
「へえ、何だよ？」
　得意げに薄い胸を張る千美に正義が律儀に相槌を打つ。
「あのカラクリ人形はエンジン無しで動かしているけれど、ゼンマイ仕掛けや歯車の組み合わせだけならあそこまで複雑かつ反射的な挙動をしたらすぐ止まってしまうはずなんだよね。
　つまりあのカラクリは自転車みたいな人力で動かされているんだよ！」
「な、何だってー！」
　ノストラダムスの大予言を聞かされたＭＭＲ隊員ばりに驚いた正義の反応に、千美はご満悦のようで眼鏡の奥の目を猫の様に細めた。
　マッドサイエンティストとしては敵の能力の解説などは「こんな事もあろうかと」と秘密兵器を出す場面に並ぶ見せ場だろう。腕組みをして「うんうん」と頷いている。
　一方の半ば義務感にかられて、驚くリアクションをし終えた正義は眉を寄せる。
「それで人力で動かしているのは判ったから、対策はどうすればいいんだ？」

「え？」

千美は細めていた目をきょとんと見開いた。敵の分析と解説をするのに頭が一杯で味方の作戦に生かすまで頭が回っていなかったようだ。

だが、敵の情報は重要とはいえ、生かすことのできなくては意味が無い。

やはり正攻法での勝利は望めないなら、自分で勝利へのシナリオを描くしかないと正義は覚悟した。

そのためにもまずは、

「相手校栗林野のデータが必要だ。特に番長戦争に出場する選手て監督、それに生徒会役員と校長と理事長なんか趣味や経歴に住所や携帯の番号にメールアドレスまで手に入る情報は全部まとめてくれ」

「……それはかまわないけど、非合法な手段をとるつもりはないよね？」

眼鏡越しにジト目で確認してくる千美に「そんな事するはずないって」と胸を叩いて請合う。

「じゃあ、今まで収集してきたデータをまとめてくるよ。……それと正義の事を仲間として信じているけど、もし警察に捕まったら『番長部は無関係です』って証言してよね。まあ、その時は正義が番長部に入部していた事実は無かった事になってるけど」

「俺のデータを抹消するプログラムを組みながら『信頼してる』ってのは勘弁してくれ」

第七話　ピーチ味のジュースをどうぞ

戦い間近の控え室で正義は右手をぐっと握り締めた。今までの試合前ならば両拳に力を入れるところだが、左手がギプスに覆われていては仕方がない。現在彼の左腕は試合用ギプスとやらで肩から拳まで一直線にすっぽりと覆われて、わずかに指先が覗くぐらいだ。これは普通にギプスを首から紐で吊るすより、動きやすいようにと左肩から右腰へと体に密着してくくりつけられている。

そんな窮屈さを我慢しながら大きく深呼吸を繰り返し、正義は胸の動悸を少しでも抑えようとするが彼の鼓動はどんどんペースアップしていく。

体が「もう戦う準備は出来ているぜ」と告げているようだ。

正義はこれでも試合経験は重ねてきているが、左目の負傷後は初の公式な試合だ。どうしても緊張が拭えなかった。

かえって一学年下の悟の方が落ち着いているようだった。

正義がいつもの長ラン・ボンタンといった面積の広い改造制服に左手のギプスがアクセントを付けているのに対し、悟は上半身裸で下にはビキニタイプの水着のボディビルダーのステージ衣装だ。

悟いわく「この輝かしい肉体を隠すほうが罪です」との意見に番長部の誰もが反対する意欲を失ったのだ。

また今も黙々と腕立てをしている。これにも勿論「試合前にスタミナを消耗するな」と正義達が忠告したのだが、悟の「パンプアップさせてない筋肉を晒すぐらいなら切腹します」との信念に押し切られた。

さらに武器の携帯が一つだけ認められているのに、裸体にこだわ

る悟はまったく興味がないようだった。
そのために正義が片手でも使用できる木刀を悟の武器として登録し、開始後すぐに渡す事にしたのだ。
怜は黒塗りの鞘に修められた日本刀を床に横たえ、正座をして黙想している。
端然としたその姿はいかにも決闘を控えた侍らしい緊張感を伴ったものだったが、時折洩れる「うふふ」という黒い含み笑いが台無しにしていた。
千美は正義達の周りを落ち着きなく歩き回り「やっぱりロケットパンチが必要だったか……」とか「今からでもこのピーチ味ジュースを向こうに差し入れに……」と呟きが止まらない。
男の控え室のドアがノックされ、『番長戦争開催委員会』と書いてある腕章をはめた真面目そうな女子高生が入ってきた。
「野際学園の生徒の皆さん。もう少しで試合が始まります。まず参加メンバーと武器の最終チェックをさせていただきますので、こちらへ提出してください」
正義は「おう」と答えてそちらに向かった。
悟は女子生徒に向かい威嚇するかのように大胸筋を誇示するポージングをとった。
怜は正座を崩さずに視線だけを彼女に投げかける。
千美は「あ、ご苦労様。ピーチのジュースでもどう？」と飲み物を勧めた。
余りに自由すぎる各々の反応に、困惑した素振りを隠しきれず首を傾げながら女子生徒は番長部の使用武器の最終確認をとっていく。

「まず綿式　怜さんは『日本刀』ですか、刃は……ああちゃんと刃引きしてありますね。結構です。
次に板井戸　悟さんの『木刀』は問題ありません。そして折葉正義さんの……『仕込みギプス』ですか？　ええ、ユニークですが中身は別に違反はしてませんしＯＫです。
はい、野際学園の武器の最終チェックは終了ですね。このシールをはっておきますからそれ以外の武器は使用しないように」

ぺたぺたと差し出された武器にシールをつけていく。それが終わると咳払いをして「ちょっとした変更がありました」とこちらから視線をそらした。

「まず試合会場はサッカーグラウンドで行われます。そしてメインスタンドから右があなたたちの陣地となっています。そして、普段はサッカーゴールのある位置にお互いの旗を設置しておきました。野際学園の守る旗の色は白で相手の栗林野高等科は赤となっています。
サッカーフィールドを越えて芝生から陸上競技のレーンまで出ると戦闘放棄としてその生徒は失格処分になります。ですので、あまりに大回りして相手の旗を奪うというのは不可能になりました」

なんでもない事のように告げられるが正義達にとっては不利になりかねないルールだった。これまでは競技場内であればどこでも移動可となっていたはずなのだから。
相手がロボットという規格外の大きさとパワーを持ち合わせているため、ある程度の距離をおいての迂回戦術も考えていたのだ。

相手も条件は同じだろうと言うのは不正解だ。例えば相撲やボクシングで一回り小さくなった土俵とリングで戦えば、有利になるのは明らかに体格が大きい方だ。つまりこの場合は巨大ロボットを持

つ側だ。
さらに陣地や旗の色までもコイントスなどで直前に決めるまでも無く、勝手に押し付けられるとはスポーツ的に考えると怪しすぎる。
これは相手高校からの抗議や圧力で変更させられたのかもしれないと正義は推測した。

「今更ルール変更かよ、しかも相手側に有利になるって不自然だな。明確な根拠がなければ抗議させてもらうぜ」

不機嫌な正義に女子生徒は一瞬目を伏せ、覚悟したかのように彼をにらみ付けた。

「わ、私だって急にルール変更だなんておかしいと思うわよ。でも上から『グラウンド内ぐらいじゃないと見にくくて、トトカルチョが盛り上がらないからルール変更ね』なんて堂々と言われたら、あたしなんて下っ端にどうしようもないじゃない。
トトカルチョってなによ、委員会が胴元ってどういうことよ。大体、この委員会に入ったのだって内申書に凄く優遇されるからって聞いてたのに、何よこれ、ただの雑用係じゃない！」
「ああ、すまんすまん。判ったから落ち着いてくれ」

スイッチが入ったように呪詛を撒き散らす女子生徒を正義はどうどうと落ち着かせる。

「変なこと聞いて悪かったな、ほら、ピーチ味のジュースでも飲んでくれ」
「気が利くわね、ありがとう」

にっこり笑って受け取った女子生徒は、ジュースに口をつけた瞬間に崩れ落ちた。彼女が床に倒れる前に上手く支えてソファに横た

えた正義が、額に滲む汗を拭い「ふう」とさわやかにいい仕事終えた笑顔を浮かべると皆の冷たい視線が突き刺さる。

「委員を気絶させてどうするつもりだい！　まだルールの最終確認も終わってないんだよ！」

「女性にこのような仕打ちとは無礼ではありませんか！」

「ギャラリーがいた方が僕の筋肉にはキレがでるのに！」

若干一名理解不能の人物もいるが、ほとんどの部員が正義の暴挙を避難している。

だが、正義も何も考えずに女子生徒に千美印のピーチジュースを飲ませた訳ではない。

「彼女に抗議しても無駄どころか俺達には時間を失うデメリットしかない。だから非常手段を使わせてもらった」

とソファの上の女子生徒に「南無南無」と正義はギプスごと手を合わせる。千美が「失礼だね！　ボクのジュースじゃ死んだりしないよ！」と髪を逆立てているが、一口で失神にいたらしめたジュースの製造者としては説得力がゼロだった。

怜も心配気に女子生徒の顔の前に手を掲げて呼吸の有無を確認し、次に胸に耳を当てて鼓動が乱れていないか注意する。最後にまぶたを開け瞳孔を調べようとしたら、女子生徒が「ここはどこでしょう？　私は……ああ、頭が痛い」と目を覚ました。

いきなりのアクシデントにも眉一つうごかさずに、怜はそっと女子生徒の肩を押して起き上がった彼女を再びソファに横たえる。

「いきなり倒れたから心配したわよ。多分貧血のようだからしばら

くここで休んでいなさい。委員会の方には私達が連絡しておくから、今はゆっくりしていなさいね」

慈母の微笑みと慣れない優しい口調でなだめる怜に、女子生徒はなぜか頬をそめて「ご迷惑をおかけします、お姉さま」と瞳を潤ませて説得に従った。

怜と見詰め合っている女子生徒以外の三人も顔を合わせる。『お姉さま』って何？　全員がクエッションマークを浮かべていると、女子生徒を上手く寝かしつけた怜がやってくる。

怜は全く表情を崩さずに、何か言いたげな正義達を控え室から押し出しと「お大事に」と一声残してドアを閉めた。

「さあ、正義はやらねばならぬ事がある為に非常手段を使ったのだろう？　急がねば試合が始まってしまうぞ」

「ああそうだな、皆も委員会まで付き合ってくれ。それと……お姉さまって何？」

「さあ、急ごうか。急がねば正義の首が落ちてしまうぞ」

怜は固まったままの慈母の微笑みのまま正義の首筋に刀を添えた。皮一枚を隔てている頚動脈へ脈を刃は触れている。抜く仕草さえ確認できないほどのとんでもない腕だが、殺気を込めて味方に振るっていい技ではない。だが、首を狙われた正義を含めて誰も文句を言えないほどの怒気を怜は漲らせている。

よっぽど『お姉さま』扱いされたのが苛立たしかったのだろうと推測し、正義は首をすくめようとして慌てて止めた。

「了解だ。急いで行こうぜ。それと、この刀が刃引きしていなかったらもう俺の動脈から血がしぶいているぞ。頼むから刀をどけてお姉さま」

「……判った正義の辞世の句は『頼むから　刀をどけて　お姉さま』

か。きちんと五・七・五になっているとは、潔く覚悟を決めた証拠だな。では短い付き合いだった」

これは切腹ではなく斬首だと日本刀を大上段に構えた怜と、両手を上げて「すまない冗談がすぎたな。許してお姉さま」と火に油を注いでいる正義の二人の後頭部を千美が叩いた。

「正義も怜も遊んでないで早く行かなきゃ失格になっちゃうじゃないか！　まだ最終的なルール確認も終わってないんだから、委員会に連絡を入れてその辺の説明もしないと」

「ええ、そうですね。ほら怜も正義もじゃれあってないで駆け足です。万一遅刻して観客が僕の美しい肉体美を拝めないなんて事になったらそれは人類の損失ですよ」

千美と悟に口々に諌められ怜も憮然と刀を納め、正義も「悪ぃ」と彼女にリーゼントの頭をかいて謝罪した。

「確かにふざけている場合じゃなかったな。とにかく試合前には委員会にクレームをつけないと、下手したら難癖付けられて即失格になりかねんな。

体調不良の委員をよこした事と急なルール変更、それを試合直前に突きつけてきた事を交渉材料にして少しでも俺達に有利にもっていかないと」

「体調不良って……あれは正義の渡したジュースのせいじゃないか！」

「おや、千美はあのジュースが有害だとでも言うつもりか？　俺はただ千美の差し入れしたピーチジュースを好意で委員に飲ませただけだぞ。まさか千美は悪影響のあるジュースを試合前の俺達に渡したのか？」

「え、いや、そんなつもりじゃ……」

強く言い返された千美は表情を曇らせて口ごもる。まあ、普通の神経をしていれば「うん、そうだよ」とは答えられないだろう。

「だから、この場は委員が体調不良だったで済ませるのが一番だ。そうすればかえってこちらが被害者であちらを責めるカードを持つ事になるんだから」

と平然と初めて会った少女に責任を負わせる正義に、番長部の他のメンバーは何か言いたげだったが諦めたように全員肩をすくめた。

反対意見が無いと判断した正義は開催委員会室に足を進めながら疑問点を挙げていく。

「大体、このルール変更も怪しい点があるんだ。試合直前にルール変更っておかしいだろう？　せめてインターバルをおくとかしなければいけないはずなのに、前の試合が終わってから今まで何の音沙汰も無く「さあ試合だ」って時に「ルール変更です」って不自然だろ。

推測だが、俺達が不利になるように工作した奴らが審判や委員会に圧力を加えているのかもしれない。だとしたら試合に間に合うように急ぐんじゃなくて、アクシデント――しかも開催委員会側のミスによるものを俺達が試合前に記録に残るように抗議するのが大事なんだ。

このまま敵に状況をコントロールされたまま試合に出てしまえば、審判にどんな些細な揚げ足をとられて失格にされてしまうか判らない。

まず、審判に抗議するより大本の委員会の方に話をつけるべきだ」

「うわー、腹黒いというか相手が悪党だと信じきってなきゃでてこない発想だね。でもそれはたぶん正義が黒いから敵もそうだ！　と

思い込んでる被害妄想かもしれないよ。
とは言っても委員会の女子生徒を眠らせ……不幸にも体調不良にしちゃったからには、どの道開催委員会に顔を出さなきゃいけないから、まあ行き先は同じか」

千美は正義を一言けなしたが行く先については納得する。その様子に怜も悟もしぶしぶ従うことにしたようだ。なんと言ってもこのちびっ子が部長なのだ、それなりに信頼をされているらしい。
さらに正義は千美に対し「こいつらに俺達が実行委員会室に突入するってメールを送ってくれ」と名簿を取り出して命令する。

「こいつらにメールを送るの！？　というか正義がやんなよ！」
「俺もできたら自分でするんだが、さすがに片手じゃ操作がやりにくい」
「う、す、すまん正義」
「怜さんが謝る必要はありませんよ。あの怪我をおして出場するなんて、正義さんも僕ら番長部の側に近づいてこれたんですから」
「ちょっと待て！　僕も悟と同じ側に分類されているのか！？」
「う、す、すまん千美」
「怜も僕をそっちに分類してたのかー！」

自分の行動でチームワークが崩壊一歩手前になっているのを気にも留めず、闊歩し続けていた正義が「ビンゴ」と足を止めた。
そこは実施委員会と張り出された部屋の前だった。他の部屋より一回り大きな窓から中が見えている。
窓から覗くと豪華な部屋の中に、委員会のメンバー以上に尊大な態度でなぜか九里林野高校の生徒会長が座っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2312x/

番長戦争へようこそ

2011年12月2日00時54分発行